

中国外文局亚太传播中心
日本科学协会
上海交通大学

主编



相知的种子

第一辑【笹川杯品书知日本征文大赛】
2019 - 2020 中文版获奖作品

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール」

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール」(中国語版、日本語版)は、中国の青少年たちが日本に関する本やアニメ、漫画、映画、ドラマなどに触れ、その感想を日本語或いは中国語で書くことによる日本文化に関する理解の深化と作文力の向上を図り、兩國青年の相互理解と友好交流が促進されることを目指します。



寄语

中日两国作为世界领先的经济大国，肩负着携手合作为世界的和平与幸福做出贡献的重要责任。中日关系的稳定不仅仅对于两国，对于世界的和平与发展也有着极大的意义。

由中国外文局亚太传播中心（人民中国杂志社）、日本科学协会、上海交通大学共同主办的“笹川杯品书知日本征文大赛”，旨在鼓励中国青年通过阅读各类与日本相关的书籍，以中文和日文撰写作文、读后感等体裁的文章，达到相互感知、相互交流、相互理解、相互尊重的目的。十余年来，主办各方都本着促进交流、增进友好的初心，矢志不渝地举办大赛，为中国青年了解日本创造条件，为中日青年对话交流提供平台。

这本作文集选自2019—2020年“笹川杯品书知日本征文大赛”的一等奖和二等奖获奖作文，30篇中文作文附有日文译文。

从这本《相知的种子》作文集中，我们不仅仅可以感受到中国年轻人对日本抱有的单纯的好奇之心，还欣喜地看到中国青年对邻国日本有着浓厚的兴趣，以及对促进中日友好有着真切的意愿。衷心期待中日两国的青年朋友们携起手来，共同创造中日关系的美好未来。

在此，谨向对大赛给予支持的日本财团、日本科学协会、上海交通大学以及全国各日语专业院校和中日各界人士表示衷心的感谢。

编者语

2023年2月

目次

★「笹川杯品书知日本征文大赛」(中文版)

霓虹深处 虹の深く

(2019 一等奖) 澳门大学 教育学院大学院 夏泳仪…001

风檐下的守望者 軒の下で見張る人

(2019 一等奖) 上海财经大学 会计学院 吴昭程…008

将美轻放在日本作家手上 美を日本作家の手にそっと

(2019 一等奖) 武汉大学 信息管理学院 刘雨贺…015

“现在 = 此处” 「いま = ここ」

(2019 一等奖) 北京大学 历史学系 刘立杰…022

孤岛 孤島

(2019 一等奖) 华东理工大学外国语学院 方晴岚…029

向死而生 死に向かって生きる

(2019 二等奖) 福建师范大学协和学院 黄少婷…036

孤独的“陪跑者” 孤独の「伴走者」

(2019 二等奖) 复旦大学 民商法 王施施…043

向死而生与物哀之美：东野圭吾笔下的“罪”与“命”

死に向かって生きるのともものあはれ——東野圭吾の描く「罪」と「運命」

(2019 二等奖) 暨南大学 海外华人文学 李宜萱…050

病隙，闲看一个人的好天气——读青山七惠《一个人的好天气》

病床のつれづれに『ひとり日和』を読んで

(2019 二等奖) 北京大学 核技术及应用专业 杨志涛…057

亲爱的知惠子 親愛なる知恵子さんへ

(2019 二等奖) 华东师范大学 历史学 吕玉琳…064

- 本分难守 本分は守り難し
(2019 二等奖)南方医科大学 临床医学 王茂源…072
- 美到极致的哀伤 美の極致の哀悼
(2019 二等奖)东北师范大学 汉语言文学 鲍芝瑾…079
- 一枕纸书 本を枕に
(2019 二等奖)聊城大学 日语专业 王咏雪…086
- 悲悯之花,只是无奈飘零——读《无缘社会》有感
哀れみの花は枯れ落ちるのみ『無縁社会』を読んで
(2019 二等奖)东北师范大学 财政学 李岱霖…094
- 我的忏悔 私の懺悔
(2019 二等奖)湖北汽车工业学院 国际经济与贸易 艾新宇…103
- 改写让文字不再徘徊 改作でテキストがうろつかなくなる
(2020 一等奖)宁波大学教师教育学院基础教育学部 周喬泽…110
- 站在坡道上的女人们 坂道に立つ女性たち
(2020 一等奖)浙江越秀外国语学院 网络传播学院 王诗妍…117
- 人生易逝,且听风吟 人生はつかの間、風の歌を聴け
(2020 一等奖)北京化工大学 材料科学与工程学院 余韦瑭…124
- 二律背反——《菊与刀》读后对日本的感性体会
二律背反—『菊と刀』を読んで日本の感性について得たもの
(2020 一等奖)中国传媒大学 电视学院 韦雨果…131
- 佛法王法俱灭: 比叡山的织田信长
仏法も王法も共に滅ぶ 比叡山の織田信長
(2020 一等奖)四川轻化工大学外语学院 孔劲阁…137
- 写给我心里藏着的那个小孩 私の心の中の隠れた子供へ
(2020 二等奖)上海交通大学材料科学与工程学院 彭宏宇…144

读《解忧杂货店》有感 『ナミヤ雑貨店の奇蹟』を読んで

(2020 二等奖) 鞍山师范学院外国语学院日语学部 宋科淇…151

川端康成: 清醒但孤独的徒劳 川端康成 冷静しかし孤独な徒劳

(2020 二等奖) 西南石油大学石油与天然气学院 吉义天宇…162

日本是朵烟花 日本は花火

(2020 二等奖) 北京化工大学文法学院 王驿尘…171

家: 一条无法逾越的鸿沟—论《人间失格》的现世思考

家という越えられないギャップ—『人間失格』の現世思考論

(2020 二等奖) 大连大连外国语大学 日本語学院 王燕……177

异类 異端者

(2020 二等奖) 中国科学技术大学 科学岛分院 张兰……184

“借来”文化的重塑与新生 「借りてきた」文化の作り直しと新生

(2020 二等奖) 中南大学 交通运输工程学院 陈楚婷…191

拥抱平凡 平凡を受け入れて

(2020 二等奖) 北京大学 北京大学物理学院物理学 李一一 …200

品日本文学书籍,知百般治愈力量

日本文学の書籍を味わい、いろいろな癒やしの力を知る

(2020 二等奖) 武汉大学 信息管理学院 黄靖……208

读《人间失格》有感 『人間失格』を読んで

(2020 二等奖) 安徽外国语学院 国际经济学院 高辉……215

笹川杯品书知日本征文大赛

中文版获奖作品

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール」

中国語版入賞作品

霓虹深处



夏泳仪

澳门大学 教育学院大学院

笹川杯作文コンクール 2019 年度一等奖

品一杯茶，尝漫山樱花，於霓虹深处，看尽世间繁华。

——题记

初遇《源氏物語》，印象最深的恐怕是那一位位或无意、或刻意登场的女子，只想用徐志摩先生的“最是那一低头的温柔，像一朵水莲花不胜凉风的娇羞”来形容。川端康成曾在诺贝尔奖获奖感言中说道：少年时期的我，虽不大懂古文，但《源氏物語》却是深深地渗透到我的内心底里。

历经四代，横跨七十多载，写尽荣华和奢靡，腐朽和淫乱。在紫式部的笔下，女子们的音容笑貌跃然纸上，聪明伶俐，却不得善终，或独守空闺，虽生独死，或削髮为尼，遁入空门，或踏进坟墓，就此落幕。怒其不争或说其悲哀，在时隔多年后的阅读中，也再无波澜。随着环境和心境的不同，再也不是用一句“好”与“不好”来概括这些女子的命运。光影交错，物欲横流，谁敢说她们不曾拥有幸福？不曾拥有快乐？既然如此，无需评价，不谈是非，就留给每一位“哈姆莱特”来品味吧。

无需細心，当你翻开《源氏物語》的时候，明显地会发现其中描绘的时代和作者所处的时代都与中华文化有着千丝万缕的联

系。白居易的诗歌、唐锦的风靡、舞乐的繁荣等等，无一不印证着中日文化的友好交流。通过将外来文化的吸收和改造，日本逐渐实现了从“汉风文化”向“国风文化”的过渡。

日本遣唐使和鉴真东渡等真实历史事件也印证着古往今来，中国和日本两国之间友好往来的痕迹。书中许多人物在生活不尽如人意之时，常常会念叨著“人生无常”“四大皆空”等佛学观，他们时而会认为“皈依佛门”是大道必然，是脱离尘世、摆脱苦海的最终归宿。除此之外，书中还充斥着人生八苦、爱别离、求不得等佛教思想，甚至边鬼神之说也在书中有所体现。不得不感歎，中日两国互相学习的文化之杂、之深。

如若不是没有机会，大概会趁著春暖花开之时，飞一趟日本，去街头赏一赏樱花，寻一处茶室，偷一些时光，给自己放松一刻。比起熙熙攘攘、灯红酒绿的大都市，大约北海道的温泉和京都的曲径通幽处更令我心动。想去那样一座与梦回大唐相差无几的异国城市，身临其境，让大唐情结和大和文化交织于身、于心。

对京都的执念，是源于它的历久弥新，深刻的文化底蕴。那种古色古香，并非一朝一夕，一砖一瓦都有它的故事，真好。它虽然以中国唐代京师长安城为蓝本，可不免会让我想起如今的南京，那座六朝古都。千年的积殿，将其优美、悲美和状美深深地揉入大和民族的骨血中。何妨听一听南禅寺的夜雨声，端详那似是而非的亭台楼阁，身著美丽和服，体验雨中漫步，贪婪地呼吸著那属于京都的味道。我想，“行到水穷处，坐看云起时”的日子也是值得拥有的。

然而与我理解不同的是，寿嶽章子将京都的“喜乐”毫无保留地展现给读者。《喜乐京都》诠释著这座城市的人伦暖意，原汁原味地还原普通人的小小幸福，从而汇成最自然鲜活的人生百态。当“京都交响曲”响起早，有人在骄阳烈日下推著笨重的小车，有人高声卖叫，有人晕染布料，豆大的汗珠也抵挡不住淳朴的京都人为这座城市所留下的一笔一划。柴米油盐酱醋茶，琴棋书画

酒花，将一群群热爱生活的人交汇在一起，何愁没有慢板、响板、和音或是回旋曲？应运而生的京都活在岁月长河里，让有意思的人和事被后世铭记。

泽田重隆的插画更是为《喜乐京都》添砖加瓦，工笔划的运筹帷幄，捕捉尘世间那一抹抹质朴和亮色，让一幅幅画与文字相得益彰。不禁让我联想起张擇端先生的《清明上河图》，一幅画卷折射出几许人间烟火色，这种温暖直达人心，恍若就生活在那个繁荣昌盛的汴京城，何其幸哉！

放下书本，宛如一场精神洗礼。我们用着自己的力量去维护那些还未被战火或是推土机所掩埋的古跡，去追寻那些留在记忆里的嗅觉和味觉。“人情味”这三个字在京都的生活中体现的淋漓尽致，让人好生羡慕。如此有滋有味的生活，怎能不令人向往？

岁月流转，霓虹不息。我想，是时候去一趟日本了。

附註：

1. 《源氏物語》—— 紫式部
2. 《喜乐京都》—— 寿岳章子、泽田重隆

【日本語訳】

虹の深くに

夏詠儀

澳門大学 育学院 大学院

お茶を味わって山いっぱい桜を愛で、虹の深くで世の中の賑やかさを見届けて。

——前書き

初めて『源氏物語』に出会ったとき最も印象深かったのは恐らく無意識にまたはわざと登場する女性の数々です。徐志摩先生の「あの頭を下げたやさしさは、水蓮の花が涼風に堪えずはにかむよう」で形容したいと思います。川端康成がノーベル文学賞受賞講演で、「少年の私が古語をよく分らぬながら読みましたのも、この平安文学の古典が多く、なかでも『源氏物語』が心におのずからしみこんでいると思います」と語っています。

四世代を経て、七十数年にまたがり、栄華と贅沢三昧、腐敗と淫乱を書き尽くした物語。紫式部の言葉遣いで、女性達の顔や声が紙上にありありと現れ、賢くて利発でも天寿を全うできない者、寝所で一人きりの生ける屍、剃髪して遁世する物、墓へ踏み込み幕を下ろす者。怒っても争わない悲しみは、何年も経ってから読み返しても変わりません。環境と心境が変わるにつれ、「吉」と「凶」でこの女性達の運命をくくることはなくなりました。光と影が交錯し、物欲が強く、彼女たちが幸せでなかったと言えるでしょうか。喜びがなかったと言えるでしょうか。こうなっては評価する必要はないので、是非を語らず一人

一人の「ハムレット」の味わいを残しておきましょう。

気楽に『源氏物語』を開いたとき、明らかに作中で描かれた時代と作者のいた時代いずれもが中華文化と複雑に入り組んだつながりを持っていることに気づくでしょう。白居易の詩歌、唐錦の風靡、舞楽の繁栄など、中日の文化の友好的な交流を実証しないものはありません。外来文化の吸収と改造を通じ、日本は次第に「唐風文化」から「国風文化」への移行を実現しました。

遣唐使、鑑真の来日など真実の歴史上のできごと、両国間の友好的往来の痕跡を、古今を通じて実証しています。また作中では多くの人物が生活のままならないとき、「人生無常」、「四大みな空なり」といった仏教観をよくつぶやいています。彼らは時々「仏門に帰依する」ことが正しい道で必然であり、俗世を離れて、苦しい境遇を抜け出した最後の落ち着く先だと考えます。ほかにも、作中は人生の八苦、愛する者と別れる苦しみ、求めても得られないといった仏教思想があふれており、鬼神の話まで出てきます。中日両国の学び合う文化の多様さ、深さにどうしても感嘆してしまいます。

機会があったら春の花咲く頃に日本へ飛んで、街角で桜を愛で、茶室を訪ねてひとときを過ごし、リラックスしてみたいと思っています。往来が盛んでにぎやかな、贅沢で享樂的な大都市よりも、北海道の温泉や京都の小道が続く閑静な地のほうに心が動きます。大唐に回帰する夢さながらの異国の都市に行つて、そこに身を置き、大唐の深層意識と大和の文化を心身に入り交じらせたいのです。

京都に対する執念は、その長い間がたってもますます新しく、深い文化的基盤によるものです。あのような古色ただよう風情は決して一朝一夕のものではなく、瓦の一枚一枚に物語があつて、実に良いのです。唐代の都、長安城が下敷きだとは言え、

六朝の古都である南京を思い出してしまいます。千年の沈積はその優美さ、悲壮な美と雄壮な美を大和民族の血に深く揉み込んでいます。南禅寺の夜の雨音を聞いて、似て非なる四阿と楼閣をしげしげと見て、美しい和服を身につけ、雨の中のそぞろ歩きを体験して、食欲に京都を味わってみてはどうでしょう。「行きて水の窮まる處に到り坐して雲の起る時を見る」暮らしも価値があると思います。

しかし私の理解と違うのは、寿岳章子が京都の「よろこび」を残さず読者に見せてくれることです。『京に暮らすよろこび』はこの街の人の温もりを解釈して、普通の人々の小さな幸福をそのまま再現することで、最も自然に鮮やかに人生の百態をまとめています。「京都交響曲」が響くとき、ある人は強い日差しの下で無駄に大きな一輪車を押して歩き、ある人は高い声でものを売り、ある人は生地をグラデーションに染め、豆粒ほどの汗も素朴な京都人がこの都市に残す一筆一画を止められません。生活必需品、文化や娯楽が生活を心から愛する人々が集まると、それは拍子木、カスタネット、和音のない輪舞曲。気運に乗じて生まれた京都は歳月の長い流れの中で生きており、有意義な人や物事を後世に伝えています。

沢田重隆の挿絵が『京に暮らすよろこび』に貢献しており、密画の筆の運びで俗世間の質朴で明るいきざまな色を捉え、一枚一枚の絵が文字と持ちつ持たれつで引き立て合っています。思わず張挾端先生の『清明上河図』を連想しました。一枚の絵巻に俗世の暮らし向きが映し出されており、こうした温もりは心に直接届きます。あたかも繁栄し盛える開封の都で生活するようで、なんと幸せなことか。

書物を置くと、まるで精神の洗礼のようです。私達は自分の力でまだ戦火やブルドーザーに埋められていない古跡を守って、記憶の中の嗅覚と味覚を追いかけます。「人情味」の三文字

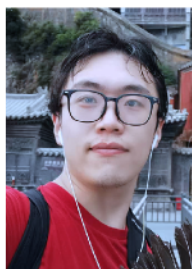
が京都の生活でことこまかく体現されていることは、実にうらやましいものです。これほど充実感がある生活には、どうしてもあこがれてしまいます。

歳月は流れ、虹は止まりません。日本に行く時だと思っています。

注：

- 1、『源氏物語』紫式部
- 2、『京に暮らすよろこび』寿岳章子（著）、沢田重隆（絵）

风檐下的守望者



吴昭程

上海财经大学 会计学院

笹川杯作文コンクール 2019 年度一等奖

“物哀，风雅，幽玄，相位”

从素雅的窗格中看见的，越过优雅的窗格而洞察的，是孤独而坚毅，哀伤而眷恋的守望者。

当黑船来航，惊醒东瀛太平的梦境，如从一扇窗，瞥见两种文明交织的生活。相互碰撞而交流的生活，在现实与梦幻里，展开又一幅文明的画卷。

谁预想到，在一扇窗中，有着如此深沉的思绪呢？

日本的窗，从荒原中走来，是恬淡安宁的窗。

早期的日式之窗，与宁静的田园志向相伴而生。在竹林的辉映下，在庭院间的回廊中，听取蛙声，雨声，和潺潺的流水声。最是静谧之处，一盏茶，氤氲的水雾中，升腾起澄澈的茶香。茶与茶道，于是在举杯的瞬间流芳。所谓“一期一会”，不错的，放下纷争、冷漠、对立，相对于茶前，静心于不再重复的会晤。那时，禅宗境界，天人合一的情境，和平包容的乐趣，在这屋檐之下，窗棂之前，平静而充满期许。

遣唐使来唐朝，面对大唐盛世的文化，并非一切照单全收。他们选取禅宗的恬淡，作为平淡的水墨志向，收藏与民族的精神

之中。大化改新以后的文明，在窗边留下一重历史的剪影，延续着田园牧歌式的水平志向。他们不崇拜伟大的苍穹，在广袤的土地与森林里，是百万神灵存在的地方。窗与自然相通，并无界限，并无障碍。在淡如水墨的生活中，窗内的禅意与宁静，融入窗外的蛙声与风雨中。仿佛是一扇窗，引暧昧的日光与月影追随；又如并没有一扇窗，正如文明与自然并无隔阂。

日式窗户采取平拉式，不同于欧洲城堡注重防卫，以重重铁栏森然戒备，他更像是一道宽厚的屏风。和煦的日光，穿堂的微风，总留下隐约梦幻的影，映出日式的暧昧柔软的审美境界。对于鬼神的平等，彰显于多神教的日本传统中，体现在窗的思想史中。所谓“鬼的眼泪”，即相信善与恶并非绝对，因此包容窗外的幽冥世界。不同于西方文化，以窗为恶魔进入的场所，于是深恶痛绝。转过视角，凝望西洋之窗，在宗教的语境下，它自绝于上帝与崇高，是幽冥与鬼神来往的地方。

在多民族聚集的欧洲大陆中，战乱带来了自我防御的需要。防御也成为窗户设计的重点。西式建筑往往追求崇高，一方面，在于向往穹顶的上升志向；一方面，在于对上帝的宗教热情。窗户位于高处，也成为一个居高临下的窗口。不同于日式的平拉门，西方开门方向多由内向外，便于迎敌。易守难攻的城邦建筑设计，总与文明的侵略性相关。而近代以来，因资本主义的发展，对私密空间的诉求，体现在房间的设计中。西方的窗户，成为一个狭小私密的窗口，任由窗内人向外俯视，隔绝窗外人窥探的眼。从一方小窗，如此向外看去，却被分隔出一个窗子以外的世界，如同去静观人与人互不相通的悲欢。

自黑船来航惊醒大梦，田园的纸窗似乎破碎，象征现代的玻璃窗，盛行于维新之中。

学得玻璃制造技艺，又以“和魂洋才”重新熔铸。透明的玻璃材料应用于窗，带来了对外世界的透彻洞察。现代化的发展，建筑结构的更新，启发了日本社会的垂直志向。摩天大楼式的向

往天空，以西方文化精粹的身份，进入原先的田园郊野，飞入寻常百姓家的生活。透明的窗，流线型的窗，伴随着电车与铁路，速度、效率、现代化的生活，在 20 世纪的日本昂首阔步、横冲直撞。现代化并不总是从容安宁，文物的废墟里，藏着粉碎的、迷茫的国魂。当摩天大楼与透明的玻璃，更改社会生活的风貌，日本的原生文明，却应当何处安放？

日本以明治维新为号角，留下了一种答案。于是西化与现代化，如同一片天蓝的底色，为原有的文明，涂抹出更加纯粹的剪影。仰望摩天大楼的崇高，无碍于眷恋田园风景的安宁；流行西洋文字的国际范，也体味茶道艺术的从容恬淡；如战争机器般扩张侵略，终学会对不同文明怀有尊敬；科技飞驰常伴有人心淡漠，自有禅宗智慧与体悟疗愈人心 ... 如一千三百年前创造片假名那样，“昌明国粹，融化新知”之后，又成为原生的文化，绽放出一种新的华彩。

一种文明，会有一种文明的光彩。但如光彩未现，落后于潮流，便伴随着文明的失落与痛楚。凝望无数流血的大地，战争如是，争端如是，误解与侵略亦如是。

于世界民族之林中，当寻得何种良药，为文明的创痛疗伤？
愿世间有一期一会的茶道，沟通世界文明间的误解与纷争
愿世间有淡如水墨的文学，传达物哀幽玄的片刻思绪。
愿风檐下的窗，成为和平的世界，那一双纯净的眼眸。

阅读书目及参考文献：

“窗”的思想史——日本和欧洲的建筑表象论 浜本隆志 著

【日本語訳】

軒の下で見張る人

呉昭程

上海财经大学 会計学院

「もののあはれ、風雅、幽玄、位相」

上品な窓枠から見えるのは、その窓越しに洞察する、孤独で剛毅な、悲しみと未練の中で見張りをする人の姿です。

黒船が来航し太平の夢から覚めた日本は、1つの窓から2種類の文明が織りなす生活を覗いているようでした。ぶつかり合い交流しあう生活は、現実と夢の中で、またひとつの文明の絵巻を展開します。

1枚の窓の中にこれほど深い情緒があろうとは。

日本の窓は、荒れ野の中から歩いてきた、静かで落ち着いた窓です。

昔の日本式の窓は、静かな田園の志向に伴って生まれました。竹林の照り輝くもとの、庭の間をめぐる回廊の中で、カエルの声、雨音、さらさらと流れる水の音が聞こえます。最も静謐な場所で、1杯のお茶の立ちこめる湯気の中に、清く澄んだ香りが立ち上りだします。お茶と茶道は、そこで嗜んでいる瞬間の名声を残すもの。いわゆる「一期一会」はいいもので、紛争、無関心、対立をよそにおいてお茶を前に向かい合い、繰り返すことのない出会いに心を静めます。そのとき、禅の世界、天と一体になる境地、平和に収まる楽しみが、この軒の下で、窓の格子の前で、落ち着きながらも期待に満ちています。

遣唐使が唐朝を訪れ、大唐の盛んな時代の文化に直面して取

り込んだものは決してすべてではありません。彼らは禅の落ち着きを選び、平板な水墨の志として、民族の精神にしまい込みました。大化改新以後の文明は、窓際に歴史のシルエットを残し、田園の牧歌的水平志向に続いています。彼らは偉大な大空を崇拜することなく、広い土地と森の中、八百万の神が存在する場所にいました。窓は自然と通じ合っていて、境界線も障害物ありません。水墨のようにあっさりとした生活の中、窓の中の清らかな心と静かさは窓の外のカエルの声や風雨の中に溶け込むのです。まるで1枚の窓のように、あいまいな日の光と月の影が付き従い、窓がないかのように、文明と自然に決して隔たりがないのです。

日本では引き戸が用いられ、防衛を重視して、次々と重なる鉄柵で嚴重に警備するヨーロッパの砦とは異なり、むしろ広くて厚い屏風のようなものです。のどかな日光、部屋を通るそよ風はいつもかすかな名残だけを残し、日本式のあいまいで柔かな審美の境地を映しだします。鬼神の平等については、多神教の日本の伝統の中で明らかに示され、窓の思想史の中で体现されています。「鬼の目にも涙」は善と悪が絶対的ではないことを信じているということであり、そのため窓の外の世界を受け入れています。窓が悪霊の入る場所とされ、極度に憎まれる西洋文化とは違うのです。

視点を変えて西洋の窓を注視してみると、宗教の文脈のもと、自ら進んで神の崇高さを離れ、冥土と鬼神の往来する場となっています。

多民族の集まるヨーロッパ大陸の中では、戦乱により自ら防衛する需要がもたらされました。防衛も窓設計の重点になっているのです。洋式の建物は崇高さを求めがちで、一方では天井に向かう上昇志向、他方では神に対する宗教的な気持ちに表れます。窓は高いところに位置して、高い所から見おろす場とも

なっています。和式の引き戸と異なり、西洋のドアは多くが外開きで、敵を迎えるのに都合よくできています。守りやすく攻めにくい都市の建築設計は、総じて文明の侵略性と関係があります。近代以降、資本主義の発展によるプライベート空間に対する要求が、部屋の設計で体现されています。西洋の窓は狭いプライバシーの窓口となり、窓の内から外を見下ろすことはできても、窓の外からの視線を遮断します。一方の小さい窓から、このように外を見ても、窓から外の世界とは隔たりがあり、人と人の互いに通じ合っていない悲喜を静観するようなものです。

黒船来航で夢から覚まされ、田園の障子が粉碎されたかのように、近代的を象徴するガラス窓が、維新の中で盛んになりました。

ガラスの製造技巧を学び取った日本人は、「和魂洋才」で鑄直しました。透明なガラス材を窓に応用し、窓の外の世界に対する透徹した洞察をもたらしたのです。近代化の発展、建築構造の更新により、日本社会の垂直志向が啓発されました。摩天楼のような空まで延びる様式が、西洋文化の精鋭としてそれまでの田園や郊外、一般庶民の生活にも飛び込んだのです。透明な窓、流線型の窓が、電車と鉄道、スピード、効率、近代化した生活に伴って、20世紀の日本を昂然と闊歩し、縦横無尽に突き進みました。

現代化はいつも落ち着く余裕がなく、文化財の廃墟の中で、粉々になって困惑した国民精神が隠れているのです。摩天楼と透明なガラスが社会生活の姿を変え、日本のもともとの文明はどこに置くべきなのでしょう。

日本は明治維新を号砲としてある解答を残しました。西洋化と現代化は真っ青な背景色のように扱い、もともとの文明がより純粋なシルエットを描き出したのです。

摩天楼の崇高さを仰ぎ見ても、田園の景色の安らぎを懐かし

むことに差し障りはありません。西洋の文字の国際習俗が流行っても、茶道の芸術の落ち着いた静かさは体得できます。戦争のロボットのような侵略でも、ついには異なる文明に対して敬意を抱きました。科学技術の疾走はいつでも心の冷たさを伴っていますが、禅の知恵があり心の癒やしを体得して……千三百年前に創造されたかな文字のように、「国粹文化を栄えさせ、新たな知恵を溶かし込んだ」後また原生となった文化のように、新たな彩りを放っているのです。

文明には文明ごとの彩りがあるものです。しかし彩りが見られず、潮流に遅れると、文明の遺失と苦痛を伴います。無数の血が流れる大地をじっと眺めると、戦争も、紛争も、誤解と侵略もそうです。

世界の各民族の中で、文明の痛手を治すどんな良薬を探すべきでしょうか。

世の中に一期一会の茶道があって、世界の文明間の誤解と紛争をほどこきますように。

世の中に水墨のように淡い文学があって、もののあはれや幽玄のひとときを伝えますように。

軒下の窓が、平和な世界になって、純粋な瞳になりますように。

読んだ本のタイトルと参考文献

「窓」の思想史：日本とヨーロッパの建築表象論 浜本 隆志著

将美轻放在日本作家手上



刘雨贺

武汉大学 信息管理学院

笹川杯作文コンクール 2019 年度一等奖

日本文学近年来愈发占据了各大书店的文学类书架，从最初的一面蔓延到多架似乎也不过是这三四年的事情。内容涉及极广，从诗歌散文到推理小说，也不乏绘本漫画。其读者层几乎可覆盖所有会来书店读书、买书的人群——上至黄发，下至垂髫，且都怡然自乐。

日本文学缘何有这么大的魅力呢？我思来想去得出了一个不甚靠谱的结论：是不是因为日本作家的多样性呢？仅就我读的较多的几位作家来讲，川端康成、三岛由纪夫、太宰治、松本清张、东野圭吾、辻村深月、伊坂幸太郎……随着一个个名字在心中浮现，各自特立独行的形象也在脑中溜起了圈。川端康成和三岛由纪夫兴致勃勃地探讨着文学理念，太宰治在旁边探头探脑，却碍于三岛由纪夫凌厉的眼刀和嫌恶的撇嘴难以靠近；松本清张与东野圭吾不紧不慢寻了套桌椅，二人各占一边，缓缓聊起了社会派与本格派的分歧及融合之路；而辻村深月和伊坂幸太郎很明显没那么讲究，随手找了几块垫子就席地而坐，你一言我一语地聊着伏笔、多视角穿插、反转在推理小说中的应用……时不时传出的笑声让整个空间快乐满溢。

我不禁继续着有趣的幻想——那么如果把同一个主题交给他们，他们又会有怎样的创作呢？不如就以文学界的亘古命题“美”来做题眼吧！

川端康成会怎么写呢？是岛村曾经看到过的“山野里的灯火照在姑娘的脸上”，还是初春“散发出浓烈嫩叶气息的后山”与“她的脖颈上，淡淡地映上一抹杉林的暗绿”？

如果是三岛由纪夫的话，不消说是金阁。是雪中的金阁“细长的柱子以其清爽的皮肤挺立着”，还是台风前“镜湖地的水草上闪烁着月光，虫声和蛙鸣此起彼伏，占据着四周”，抑或是放火前“薄木修葺的屋顶高耸，金凤凰连接着无明的长野”，想必他也颇为纠结吧。

太宰治谈起美，先想到的可能是那件广为流传的“新得到的适合夏天的浴衣”吧，毕竟美到可以为此多忍耐半年生的痛苦。又或者是“浅牡丹色的、同灰色的阴雨天空融为一体，形成柔和得妙不可言的色调”的毛衣？它出自“真正的贵族”母亲之手，其中的谐调是天地自然之美的彰显。

剩下的推理作家又会发表怎样的高见呢。松本清张也许会提到照子和耕作去寻找森鸥外踪迹时去过的山林吧，“山路两旁堆积着落叶，冬阳从树叶落尽的光秃枝头之间洒落。行动不便的耕作被照子牵着，她的手指柔软又温暖，还带着年轻女孩特有的甜美气息。”他这么说。

东野圭吾应该会微微一笑，露出赞成的神色，想起他作品中与此似乎有所呼应的情节：数学教师石神的寻死被新搬来的邻居的门铃声打断，拉开门的瞬间便被美贯穿。“怎么会有眼睛如此美丽的母女”、“他从未被任何东西的美丽吸引、感动过……然而这一瞬间，他全都懂了，他发觉这和求解数学的美感在本质上乃是殊途同归”。

小一辈的辻村深月和伊坂幸太郎继续着七嘴八舌的探讨。“是诸事大吉之日发生的一切吧？”辻村首先发声。“啊，我倒是觉得

美应该诞生在某个不为人知的小岛上呢。”伊坂不甘示弱。“落日时分吗？”“嗯，有鸟和稻草人。”“那也应该有欢笑的人群！”“啊啊，那就是如此吧。”

当然以上全部都是我依靠阅读得来的想象罢了。从未在现实中谋面的作家仅凭文字就可以在读者脑海中栩栩如生，不得不说是文字的魅力。而之所以能形成如此鲜明的作者形象则是由于日本文学、日本作家的特点。

他们不惧怕在文字中流露自己的一切。生死观、审美观、人生观、价值观……其中最常被提起的就是生死观与审美观。二战后，美国文化人类学者出版了一部分析日本国民性的专著，名为《菊与刀》。“菊”指他们恬淡宁静、热爱艺术与美，同时性格中也不乏“刀”——穷兵黩武且时而变态至极。当然其中有些片面思考，但同时也颇具启发性。

如果让我用两样事物描述其国民性，我会选择“樱与刀”。

樱花是日本最具代表性的花卉，每年春天持续整季的赏花大会基本是日本人必参加的群体活动。与家人、朋友、同事围坐樱花树下，满开的樱花在风中四散，部分吹落在地，部分随波逐流，将物哀之美演绎得淋漓尽致。他们喜欢“盛极而衰”、好比花火和樱落；喜欢“不长久”和“残缺”，好比谨遵侘寂原则的茶器与庭院。但矛盾性就在此刻体现，他们不是佛，不能真正接受随缘而定，“刀”的一面随之显现，用极锋利、极舍身的方式去维护来之不易的、易逝的美。求与求不得被日本作家构建为一种更为悲伤的、更关花鸟风月的风格。推崇着美却不忍直说，只敢环绕四周，用最天然、最轻柔的自然风景将其包裹，用委婉的辞藻辗转表达，生怕一点点多余的、喜爱的呵气都会吹散美的神韵。其难也如此，哀也如此。

所以，请务必将美轻轻放在他们的手上。

【日本語訳】

美を日本作家の手にそっと

劉雨賀

武漢大学 信息管理学院

ここ数年、日本文学が大型書店の文学の棚を埋めるようになってきました。最初 1 面だったのが何本にもなったのはこの 3 ~ 4 年のことです。内容の幅もごく広く、詩歌と散文から推理小説まであり、絵本や漫画もかなりあります。読者層は書店で読書し、本を買うほぼすべての層を網羅しており、老若男女を問わず心が満ち足りた様子です。

日本の文学にはどうしてこれほど魅力があるのでしょうか。さんざん悩んで頼りない結論にたどり着きました。日本の作家の多様性が理由なのでは。私がよく読んできた作家だけでも、川端康成、三島由紀夫、太宰治、松本清張、東野圭吾、辻村深月、伊坂幸太郎……どの名前も心に浮かべると、それぞれに独立独立歩したイメージが脳内に溜まってきます。川端康成と三島由紀夫は興味津々で文学の理念を探求し、太宰治はその傍でのぞき見していますが、三島由紀夫の激しく刺さる視線と嫌悪する口元に怯え近づけずにいます。松本清張と東野圭吾は慌てることもとろとろすることもなくテーブルを探し、2 人それぞれが片側に着席してゆっくりと社会派と本格派の相違と融合する道について雑談を始めます。辻村深月と伊坂幸太郎は特にこだわりなく、手近な席に座って、伏線、多い視点からのエピソード、推理小説での反転の応用などなどやりとりを……ときどき伝わる笑い声で空間全体が楽しみにあふれているイメージです。

思わず面白い幻想を続けてしまいました。ではもし同じテーマを彼らに出したら、彼らはどんな作品にしてくれるでしょうか。テーマには文学界の昔からの命題「美」が一番ですね。

川端康成ならどう書くでしょうか。島村が目にした「娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時」、それとも初春の「若葉の匂いの強い裏山」と「首に杉林の小暗い青が映るやう」でしょうか。

三島由紀夫ならば、言うに及ばず金閣です。雪中の金閣が「細身の柱を林立させて、すがすがしい素肌で立っていた」か、台風の前「月は鏡湖池の藻のあいだにかがやき、虫の音や蛙の音があたりを占めている」か、それとも放火前の「柿茸の屋根の頂き高く、金銅の鳳凰が無明の長夜に接している」か、きっと彼もたいへん困惑することでしょう。

太宰治が美を語るというとなまず思い浮かぶのが中国ではおなじみの「新しく手に入れた夏向きの浴衣」でしょう〔日本語原文に該当の表記はありません〕。結局、美のために半年もの苦痛を我慢しています。もしくは「この淡い牡丹色の毛糸と、灰色の雨空と、一つに溶け合って、なんとも言えないくらい柔かくてマイルドな色調」のセーターでしょうか。「本当の貴族」の母の手によるもので、そのグラデーションは天地の自然美を明らかに示しています。

残る推理作家はまたどんなご高見を発表するでしょうか。松本清張は照子と耕作が森鷗外の足跡を追って入った山林を持ち出すかもしれません。「道の両側は落葉がうず高く積って、葉を失った裸の梢の重なりから、冬の日射しが洩れ落ちていた。足の不自由な耕作は、てる子に手をとられていた。柔らかい、やさしい指だし、甘い匂いも若い女のものだった。」と書いています。

東野圭吾は彼の作品中で少し呼応するくだりがあるのを思い

出し、微笑して賛成の顔を見せるはずです。数学教師の石神が自殺しようとしたとき隣に引っ越してきた親子がチャイムを鳴らすので中断され、ドアを開いた瞬間、美に貫かれたのでした。

「何という綺麗な目をした母娘だろうと思った。それまで彼は、何かの美しさに見とれたり、感動したことがなかった。芸術の意味もわからなかった。だがこの瞬間、すべてを理解した。数学の問題が解かれる美しさと本質的には同じだと気づいた」。

少し若い世代の辻村深月と伊坂幸太郎は推論を口々に言い続けます。「大安の日に起きること全部でしょう？」辻村が先に声を上げます。「むしろ美は人知れぬ小島で生まれるはずだと思いますけどね」伊坂は弱みを見せたくないようです。「日の入りの頃？」「そう、鳥がいて案山子があつて。」「それなら明るく笑う人たちもいるはず！」「ああ、それじゃそういうことで。」

もちろん以上すべて私が読書から得たものによる想像です。現実の中で一度も会ってない作家が文字の力だけで読者の脳裏の中で生き生きとしていられるのは、文字の魅力だと言わざるを得ません。これほど鮮明な作者のイメージを描けるのは、日本の文学、日本の作家の特徴のためです。

彼らは文中に自分のすべてが現れることを恐れませんが、死生観、審美観、人生観、価値観……中でもよく話題になるのは死生観と審美観です。第二次世界戦争の後、米国の文化人類学者が『菊と刀』という日本の国民性を分析する専門書を出版しました。「菊」は彼らの落ち着いたもの静かさ、芸術と美を愛する姿を指しますが、同時にその性格には「刀」もかなりあります。好戦的でしかも時にひどく変態なのです。もちろん多少は一方的な考えですが、同時に啓発性をかなり備えています。

もし自分が違う物事を使ってその国民性を述べるなら、「桜と刀」を選ぶでしょう。

桜は最も日本を代表する花で、毎春の花期いっぱい続く花見は日本人がほぼ必ず参加する集団活動です。家族、友達、同僚と桜を囲んで座り、満開の桜は風の中で四方に散り、一部は落下して一部は流れて行き、もののあはれの美を詳しく徹底的に演繹します。彼らは花火や散る桜のような「盛者必衰」を好みます。また謹んでわびさびの原則に従う茶器と庭のような「はかなさ」と「不揃い」も好みます。しかし矛盾性はそのとき現れていて、彼らは仏ではなく、本当に縁や定めに従い受け入れることができずに、「刀」の一面が顔を出します。きわめて鋭い、自分を犠牲にする方法でたいへんな、はかない美を守ろうとするのです。日本作家にもっと悲しい、もっと景色に関わる風格は求めようがありません。彼らは美を尊重しつつ率直に言うことをよしとせず、ただ周囲を巡って、最も天然で最もなめらかな自然の景色でくるみ、婉曲な言葉の修飾で転々と表現し、ほんの少しの余分な、好感の呼気で美しい風格と趣を吹き散らすことをひどく恐れます。困難も、悲しみもそうです。

だから、美は是非そっとぜひ彼らの手に乗せてください。

“现在 = 此处”



刘立杰

北京大学 人文学部

笹川杯作文コンクール 2019 年度一等奖

作为一个自小读中国近体诗的人，刚接触到俳句时，我是颇不屑的。短短的十七个音便组成了一篇文学作品，没有起承转合，没有重章叠唱，甚至没有对仗。作为文学体裁，是不是失去了艺术的价值？

但是俳句，越读越让人入迷。松尾芭蕉言：“物之所见之光依然不消于心，宜言止。”俳句就是一种瞬间的艺术，所有的时间在句子中静止，留给读者的却是无尽的感触。俳句不需要多么精巧的构思，当你走在街上，看见春光穿过树林，又或是听见秋风掠过树梢，你的心里有所感觉，一首俳句便诞生了。

加藤周一说，俳句是关注“现在 = 此处”的作品，也是“日语抒情诗形式历史发展的最后归结”。其实，按照加藤的意思，俳句不仅是日语抒情诗的归结，也是日本文化的缩影。

被誉为当代日本“百科全书式”学者的加藤周一，在 88 岁时写出了《日本文化中的时间与空间》一书，他在后记中写道：“本书是对作者关于日本思想史思考的一个总结。”在书中，他结合日本文化的方方面面，并对比东西方其他国家的语言、历史，详细阐述了日本文化“现在 = 此处”的特性。他写到了日语中动词

后置的独特结构，写到了日本的传统村落与锁国，写到了茶室、神社、天守阁，也写到了“老江户没有隔夜钱”与福泽谕吉的“大势主义”。行文轻松，涉及面广，将我所读过的知识串连起来又补充了许多新鲜的内容，使我深受启发。

日本文化之初起，似乎可以上溯到律令时期。日本从当时的唐朝学来了一套基本的国家制度，至此便稳定发展起来。尽管中国的文字与近体诗也在同一时间进入了日本，二者的文化底色却截然不同。日本的文学经典如《万叶集》与《源氏物语》，蕴含着一种被后世称作“物哀”的元素。大西克礼在《物哀·幽玄·寂》中讲到，“物哀之情”便是“知物之心”，知道外物现在很美，也知道外物随时会凋零。于是，一种无可奈何但又追求极致唯美的境界便被打开了。这一时期的散文特点最为突出，《枕草子》所记载，不过是宫廷日常生活之二三事，却每每能在瞬间打动人，并流传至今。

贵族时代在几百年后被武家终结，日本文化中“现在 = 此处”的特征却没有发生变化。北条家族本尚节俭，建造武家府邸时开启了“扩建”的建筑原则，并不会事先对整体进行规划，而是依用而建，随时扩建。所以武家府邸一般不会呈现出对称布局，这是注重眼前的观念所造成的。武士之间的“下克上”也时常会引起政局的动荡，时人多有如《徒然草》一般“人生无常”之叹。这些观念暗中又强化了日本的文化特征。

武家与禅宗的合体，最终将“现在 = 此处”的文化特征推向了极致。铃木大拙在《禅与日本文化》中介绍，“‘悟’即‘禅’，是不依赖于概念直接到达真理”，而“日本人的心理优势在于直觉地抓住最深刻的真理，借表象将其清晰的实际表现出来”。有着“现在 = 此处”文化基础的日本人是善于参禅的，并且在禅的基础上，日本人发明了茶道、花道、武士道。这些文化支系，触及的都是禅宗“悟”的体验，即要求达到“无心之心”，在瞬间里进入无意识。禅宗完成了日本文化的哲学化，让人能够超脱时间与空间，与此

同时，其文化基础“现在 = 此处”，也进一步被深化，进入了民族性格中。

日本文化的“现在 = 此处”特征所带来的成就是有目共睹的，日本人将自己的文化打造成了一颗钻石，每一个细小的切面上都光艳动人，每一个瞬间都无比夺目。但这一特征带来的并非全是益处。

丸山真男在《日本的思想》中提到，日本思想史研究面临着诸多困难，而没有一个一贯的思想体系是造成困难的原因之一。诚然，由于“现在 = 此处”的文化特征，传统的日本人好像并不善于进行哲学思考，也很少会出现举世闻名的思想家。同时，由于关注“现在 = 此处”，日本人善于变通，随时准备着转向，而不是固执地坚守着一些价值，这样的行为也为日本在道义上招来了些许批判。

世界文化色彩纷呈，需要更多的了解，也需要更多的交流。

阅读书目：

《日本文化中的时间与空间》，【日】加藤周一 著，【中】彭曦 译，南京大学出版社

参考文献：

《物哀·幽玄·寂》，【日】大西克礼 著，【中】王向远 译，上海译文出版社

《禅与日本文化》，【日】铃木大拙 著，【中】陶刚 译，生活·读书·新知三联书店

【日本語訳】

「いま＝ここ」

劉立杰

北京大学 人文学部

幼少から中国の近体詩を読んできたので、俳句にふれたばかりの頃、私は軽蔑していました。たった十七音で構成される文学作品で、起承転結もなく、類義語をたたみかける表現もなく、対句さえありません。文学の様式として、芸術の価値を失っているのではと思っていました。

しかし俳句は読めば読むほど夢中になってしまいます。松尾芭蕉は「物を見て取所を心に留めて不消、書写して静かに句すべし」と言っています。俳句はある種の瞬間の芸術であり、すべての時間が句の中で静止し、読者に限りない感動を残します。俳句には凝った構想が要らず、街を歩いているとき、春の木漏れ日を目にしたとき、秋風が梢をかすめる音を聞いたとき、心に感じたもので一首の俳句が生まれます。

加藤周一は、俳句は「いま＝ここ」に注目した作品であり、「日本語叙情詩形式の歴史の発展の最後の帰結」でもあると述べています。実際はその意味のとおり、俳句は日本語叙情詩の帰結であるのみならず、日本文化の縮図でもあります。

現代日本の「百科全書的」学者と称えられる加藤周一は、88歳の時に著した『日本文化における時間と空間』のあとがきで「この本は日本の思想史について私の考えてきたことの要約である」と書いています。同書で彼は、日本文化のさまざまな面を結びつけ、東西の他国の言語や歴史と対比して、日本文化の「い

ま＝ここ」の特性を詳しく述べています。彼は日本語のうち動詞を後に置く独特な構造について、日本の伝統的な村と鎖国、茶室、神社、天守閣、そして「江戸っ子は宵越しの銭を持たない」と福沢諭吉の「大勢主義」についても記しています。軽い筆致で幅広い内容を扱い、私が学んできた知識を串刺しにしてさらに多くの新鮮な内容を補充してくれた同書には、深く啓発を受けました。

日本文化の初めは、律令時代まで溯れるようです。日本が当時の唐朝から学んだ基本的な国家制度が、この時期に安定して発展しました。中国の文字と近体詩も同じ時期に日本に入ったものの、二者の文化は背景色が明らかに異なります。日本文学の古典『万葉集』や『源氏物語』には、のちに「もののあはれ」と呼ばれる要素が含まれています。大西克禮は『幽玄とあはれ』の中で、「もののあはれ」とは「ものを知る心」で、外在する事物の現在の美しさと、いつでも零落してしまうことを知ることだと述べています。そこで、どうしてもなく極致の耽美を求め境地が開かれたのです。この時期の散文の特徴は最も際立っていて、『枕草子』に記されているのは宮廷日常生活のあれこれですが、往々にして一瞬で感動を呼び、今なお広く伝わっています。

貴族の時代は数百年後、武家によって終結させられますが、日本文化の「いま＝ここ」の特徴には変化が発生していません。北条一族は節約を尊び、武家の屋敷を建築する時「増築」の原則を打ち立てました。事前に全体を計画することなく、用途によって随時増築していくのです。このため武家屋敷は一般に対称的な間取りとなっていないのは、目の前の観念を重視したことによるのです。武士の間の「下克上」もよく政局の動揺を引き起こして、『徒然草』のように「人生の無常」を嘆く人も多くいました。こうした観念は陰でまた日本の文化の特徴を強化し

ています。

武家と禅が合体し、最終的に「いま＝ここ」の文化の特徴を極致に推し進めました。鈴木大拙は『禅と日本文化』の中で、「悟りは禅であり、概念に依存にせず直接到達できる真理」で、「日本人心理の強みは直感的に最も深い真理をつかみ、表象を利用してそのはっきりした実際を表すところにある」と説明しています。「いま＝ここ」の文化の基礎を持つ日本人は禅に優れ、禅を基礎として日本人は茶道、花道、武士道を発明しました。これらの文化の支流が触れているのはすべて禅の「悟り」の体験、つまり「無心之心」に達し、一瞬で無意識に入ることを目指しています。禅が日本文化の哲学化を完成して、人に時間と空間を超越させたと同時に、その文化の基礎「いま＝ここ」もさらに深く民族の性格に入ったのです。

日本文化の「いま＝ここ」の特徴がもたらした業績は誰の目にも明白で、日本人は自らの文化をダイヤモンドに作り上げたのです。それぞれの小さい断面がすべてあでやかに輝いて感動させ、一瞬一瞬が比類なくまばゆいのですが、この特徴はいいことばかりではありません。

丸山真男は『日本の思想』の中で、日本の思想史研究は多くの困難に直面しており、困難な原因の一つは一貫したイデオロギーがないことだと述べています。確かに、「いま＝ここ」の文化の特徴のため、伝統的な日本人は決して哲学の思考を行うことに優れておらず、世界的に有名な思想家もあまり現れません。また、「いま＝ここ」に注目するため、日本人は融通をきかすことに優れ、いつでも転向に備えており、特定の価値観に固執しません。このような行為も日本への道義上の批判を招いています。

世界の文化は色とりどりなので、もっと多く理解し、もっと多く交流しなければなりません。

読んだ本：

『日本文化における時間と空間』、【日】加藤周一（著）、【中】彭曦（訳）、
南京大学出版社

参考文献：

『幽玄とあはれ』、【日】大西克禮（著）、【中】王向遠（訳）、上海訳文
出版社

『禅と日本文化』、【日】鈴木大拙（著）、【中】陶剛（訳）、生活・読書・
新知三聯書店

孤岛



方晴岚

华东理工大学 外国语学院

笹川杯作文コンクール 2019 年度一等奖

听闻过往，十忆九伤；听闻世态，实在炎凉。

听闻旧友，十人九忘；听闻生活，实在无望。

听闻都市，十言九悲；听闻人生，实在离殇。

读《都会中的孤岛》，实在让人惊艳。整本书笼罩着淡淡的灰色，扑面而来的是战争后的沧桑感和厚重感，人们在俗世尘灰中彷徨，徘徊，苟且，堕落，救赎。

平凡的生活中蕴含着出乎意料的结果，人生终点的死亡忽然成为平庸人生的出口，正确的选择得不到理想的结果。无论是《玩具箱》中庄吉抱着以前的成绩坐吃山空还没责任感不知廉耻的喝酒玩女人，还是《水鸟亭》中好不容易做了个大地主却因为脑子不活络羡慕乞丐最后自缢于鸡舍的梅村亮作；无论是《白痴》里误以为被爱的白痴女人和渴望肉体的男人，还是《都会中的孤岛》着了美也子的道做了替死鬼的阿弁。每个人都有每个人的悲哀，恶俗的作家固然因为梦想的破灭而终结，不作为的村长终究无法理解他关心的人，战争里的人连平庸的资格也没有，谁又看得透他的爱情？

这一切的一切仿佛印证了书名《都会中的孤岛》，他们都在过着活着混着自己的生活，在自己那间封闭漆黑看不到希望和未来

的屋子里，执着于自己所执着的，将自己缚作泡沫般的茧，天堂与深渊同在。

整本书似乎让我想到无赖派的代表人物太宰治先生的“生而为人，我很抱歉”，那种自嘲和自虐的态度，病态和阴郁的东西，在堕落中堕落到底也毫无意识的孤岛感深深令人惊异。但个人觉得这种隐喻却更是体现出作者内心的批判和推翻。

文学来源于时代，作品来源于生活。这部作品，就像是第二次世界大战后部分人部分生活的缩影。封建的旧制度，迷茫的新时期，新旧价值观的冲突，也许堕落的本质是希望，批判是为了重生，否定是为了期待。于漆黑世界里期盼光明，本身就并非易事。堕落并非是堕落，也许人需要在正确的堕落道路上，发现自我，救赎自我。这本质上并不是悲观的态度，无赖派也不是颓废悲观的代言人，这些看起来让人如同置身深海般压抑的文字，只是寻找真实的表象，以此来恢复人的本性，推翻过往，寻求真相。置之死地而后生，处之堕落而觉醒。

我在学习品读这本书的过程中，逐步学习体会大和民族。日本人骨子里的那种暧昧，理性感性得刚刚好，孤独热闹得刚刚好，克制，冷静，追求以心传心，礼貌待人，细致完美，却又有逃脱不开的距离感。通过敬语和礼仪等方式，压抑内心，而情感却在细微之处表达出来。作者通过下层人士的生活，一丝一扣地将那种自嘲和忧郁展露无遗。而小人物的内心起伏，压抑中的无奈，一切都表达地自然却又深刻。

这本书不仅具有回顾历史，思考曾经的意义；而且还能够透过这本书感受当下日本人的生活状态，正如书中所说，“许多人即使身处都会正中央，也像是生活在孤岛之中。他和她们会乘着电车和巴士去上班，去购物，但这只是去外面走一圈而已，不少人的个人生活过得完全就像住在孤岛上一样。”这段话即使拿到如今的日本也值得深思。

日本经济新闻调查后指出，日本男性是世界上最孤独的族群。

不仅是日本男性孤独，日本儿童也是世界上最孤独的。日本人的孤独感仿佛是与生俱来的，受岛国环境、思维形式等的影响，日本人把内心的孤独当成常态，却十分害怕在群体中感受到孤独感，因为那将意味着自己被边缘化，他们会在内心体味孤独的同时想方设法融入集体中去，哪怕只是个假象，也要融入到集体中，对所有人都是礼貌微笑，绝不坦露真情。近藤大介在书中说：“然而如今东京的街道，只有安静、干净和‘成熟’。”日本人习惯伪装自己，不打扰别人，悲伤也好，喜乐也好，静静的。眼前风起云涌，面上平静如水。

这种带有淡淡消极感的孤独随着时代的发展逐步演变成为了如今我们说的丧文化，它反映出当前青年的精神特质和集体焦虑，在一种程度上是新时期青年社会心态和社会心理的一个表征。大多数的年轻一代，他们感到丧的原因主要包括单身、房价、工作等。在年龄增长面前，生活困境所产生的焦虑和无力感，使新一代的年轻人选择了这样的一种表达方式去宣泄一种生活上的空虚和不满。而在这背后则是年轻一代对社会温柔的反抗。“丧”文化虽然看似悲观、颓废，但在颓废之中也展露出一些与压力重重的生活进行对抗的乐观心态，其实还是对生活充满向往的。

罗曼罗兰曾经说过“世界上只有一种真正的英雄主义，就是认清了生活的真相之后依然热爱”。可以丧，但不会绝望；可以孤独，但不会因此放弃生活。哪怕身处孤岛，不怕诚实的堕落。

喷薄欲出的孤独沉浸其中，面对生活的一地鸡毛，真正的期待才开始浮现。

悲观颓废的空虚扑面而来，面对困境的焦虑无力，真正的反抗才开始上演。

为天地立心，为生命立命，为往继绝学，为万世开太平。

为时代立心，为生活立命，为未来期望，为光明而反抗。

【日本語訳】

孤島

方晴嵐
華東理工大学

交際のことを聞くと九割が悲しい記憶、世相のことを聞くと暑さと涼しさ。

旧友のことを聞くと九割が忘れており、生活のことを聞くと本当に望みがない。

都市のことのことを聞くと九割が悲しい話で、人生のことを聞くと本当に痛々しい。

『都会の中の孤島』を読むと、あでやかな美しさに驚嘆させられます。全文がうっすらと灰色に覆われ、真っ向から来るのは戦後の世の変転と重々しさ。人々は俗世の塵やほこりの中で迷い、さすらい、良心をごまかして、墮落し、清算しています。

平凡な生活の中に思わぬ結果が含まれ、人生の終点である死が急に平凡な人生の出口になって、正しい選択は予想する結果が得られないのです。『オモチャ箱』の庄吉が、かつての成績を胸に働きもせず、身上を潰してもなお責任感も恥ずかしげもなく酒色に耽る姿にしても、『水鳥亭』のたいそうな大地主でありながら頭の回転が鈍いため乞食にあこがれ最後には鶏小屋で首をつってしまふ梅村亮作にしても、『白痴』の愛されていると誤解した白痴の女と肉体を渴望する男にしても、『都会の中の孤島』のミヤ公の身代わりになったグズ弁にしても。誰にでも人それぞれの悲哀があり、凶悪で俗っぽい作家ももちろん夢破れて終わり、何もしない村長は結局その気にかかる相手を理解で

きませんでした。戦争の中の人には平凡である資格さえないのに、彼の愛情を見破れる人などいるはずもありません。

この一切合切がまるで書名『都会の中の孤島』を裏付けているかのようです。彼らはすべて生きて無為に自分の生活を過ごしており、希望も未来も見えない漆黒の殻の中で自分のこだわり執着し、自分を泡のような繭に縛りつけ、天国と深淵が共にあります。

全体として無頼派を代表する太宰治先生の「生まれて、すみません」を想起するような、自嘲した自虐的な態度や、病的な状態とうとうしい事物が奈落の底まで墮落しても少しも意識しない孤島感には驚かされます。しかし個人的にはこのような隠喩はむしろ作者の内心の批判と転覆を体現しているように感じます。

文学は時代から生まれて、作品は生活から生まれるものです。この作品は、戦後の一部の人の一部の生活の縮図のようです。封建的な古い制度、茫漠とした新しい時期、新旧の価値観の衝突。もしかすると墮落の本質は希望、批判は再生のため、否定は期待のためなのかもしれません。漆黒の世界の中で光明を期待すること、そのものが決して簡単なことではありません。墮落は決して墮落ではなく、人は正しい墮落する道の上で、自分を見つけ、取り戻す必要があるのかもしれません。これは本質的に悲観的な態度ではなく、無頼派も頹廢や悲観を代弁しているわけではありません。深海に身を置くような重苦しい気持ちにさせる文は真実を探る表象に過ぎず、それによって人の本性を回復させ、関わりを清算して、真相を求めるものです。死地に置かれてはじめて活路を見出し、墮落に身を置くことで目覚めるのです。

この本を学び味わう中で、次第に大和民族のことが分かってきました。日本人は腹の中が曖昧で、理性と感性、寂しさとに

ぎやかさのバランスが良く、抑制的、冷静で、以心伝心の心を求め、礼儀よく人に接して、入念で、それでいて離れられない距離感があります。彼らは敬語や礼儀などの形で内心を押さえつけ、感情は細かいところで表現します。作者は底辺の人々の生活を通じて、そうした自嘲と憂鬱をあからさまにしているのです。小人物の感情の起伏、抑えられた中でのどうしようもなさ、すべて自然でありながら深い表現です。

この本は歴史を振り返り考えるかつての意義だけでなく、この本を通じて日本人の生活の状態を感じる意義もあります。ちょうど作中にあるとおり、「都会の真ん中にだって、孤島の中のように生活している人はタクサンいるものだ。彼や彼女らは、電車やバスなどに乗って勤めにでたり買物にでたりすることはあるが、それはヨソ行きの生活で、その個人生活は全く孤島の中のように暮している人は少くはない」のです。この話はたとえ今の日本を持ち出したとしても熟考に値します。

日本経済新聞の調査によると、日本の男性は世界の最も孤独なグループです。日本の男性だけでなく、日本の子供も世界一孤独です。日本人の孤独感は生まれつきのようで、島国の環境、考え方などの影響を受けて、日本人は内心の孤独を常態と見なしながらいながら、集団の中での孤独感を非常に恐れます。自分が主流から追いやられることを意味するからです。彼らは内心で孤独を味わいながら思案をめぐらして集団の中に溶け込もうとします。たとえ仮にでも、集団に溶け込んで、誰にでも礼儀正しくほほえみ、決して本心を明かしません。近藤大介は著書の中で「しかし今の東京の町には静かさ、清潔さと成熟しかない」と述べています。日本人は自分を偽装することに慣れ、他人の邪魔をせず、悲しもうが喜ぼうがそっとしています。目の前で大風が起り黒雲が湧いても、平静な表情をしています。

こうした冷ややかな消極感のある孤独は時代の発展につれて

次第に変化し、今の中国で言う「喪文化」になっています。「喪文化」は現在の青年の精神の特質と集団の焦りを反映しており、新時代の青年の社会意識と社会心理がいくらか表出したものです。若い世代の大多数が気力をくじかれて感じる主な原因は単身、住宅価格、仕事などです。加齢を前に、生活の苦さによる焦りと無力感のため、新世代の若者はこのような表現方式で生活上の空虚さや不満を発散することを選んでいきます。この背後にあるのは社会のやさしさに対する若い世代の抵抗です。「喪文化」は悲観的、退廃的に見えますが、退廃の中でも圧力の次々と重なる生活と対抗する楽観的な心理状態が見られ、実はやはり生活に対するあこがれで満ちています。

ロマン・ロランは「世界でただ一つの真の英雄主義は、生活の真相を見分けた上で心から愛することだ」と語っています。気落ちしても絶望することはなく、孤独でもそのために生活を放棄することはありません。たとえ孤島にいても、誠実な墮落は恐くありません。

噴出しそうな孤独に浸り、生活の細々としたことに向き合っ
てこそ、本当の期待が浮かび始めるのです。

悲観的で退廃的な空虚が真っ向から来て、苦境の焦りと無力
さに向き合っ
てこそ、本当の反抗が幕を開けます。

天地のために決心して、生命のために命を捧げ、進むため断
絶した学問を継ぎ、万世のために太平を開くのです。

時代のために決心して、生活のために命を捧げ、未来のため
に期待して、光明のために抵抗するのです。

向死而生



黄少婷

福建师范大学 协和学院

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

去往地狱，路过人间。《人间失格》主人公叶藏迷茫地被带到这个虚妄的世界，怯懦又软弱，习惯用技巧讨好他人，借以来触摸自己真正存在的温度。不知“爱”为何物，却无休止地寻找爱，寻找真正的自己，最后深觉人间太苦，想极力将自己从这个世间抹去，于是选择死亡，去往地狱。

失格，即丧失做人的资格。伪装，阴暗，堕落，自杀。一个极端讨好型人格的人间磨难，叶藏的多数经历与太宰治相似，同样找不到人生意义，逃避现实，自我沉沦，最终自我毁灭。

“我最大的不幸，就是缺少拒绝的能力。我害怕一旦拒绝别人，便会在彼此心里留下永远无法愈合的裂痕。”“从孩提时代起，我就一直在讨好周围的人，这是我对人类最后的求爱。”为了讨人欢心，故意说笑话，为了迎合父亲的心理，故意选择自己不喜欢的礼物。对讨厌的事物不能说讨厌，对喜欢的事物不能说喜欢。正是这种“讨好型人格”，他的一生都充满了“耻辱”。一个不会拒绝的人，之所以不敢拒绝，是因为恐惧人性，他不知拒绝会给自己带来什么样未知的伤害，这要比眼下的不拒绝所承受的可知伤害可怕多了。敏感的人会被动性洞穿对方的难处，即使委屈自己，

也总想着为对方分担一些，往往敏感的人在事情未发生之前便提前自我创造了痛苦。正如太宰治在《候鸟》里曾言：“太敏感的人会体谅到他人的痛苦，自然就无法轻易做到坦率。所谓坦率，其实就是暴力。”所以那些共情力弱的人，是很自私光明地幸福着，也因此叶藏对待人世间的态度是消极和悲观的，他任凭自己一点点在深渊里沉沦，却无一丝想要救赎自己的念头。所谓自杀者不是不怕死，只是更惧怕生罢了。

叶藏曾说过：“我知道有人是爱我的，但我好像缺乏爱人的能力。”从小到大，叶藏从未感受过来自家庭及学校的温暖，他恐惧与家人一同进餐，因为那是一个庄严肃穆的仪式，只有一张张只顾扒饭的脸。他生性寡言，害怕冷场，总是率先讲笑话逗笑众人，卖命演戏讨好老师同学，而他们也只是照单全收而已。其实丧失为人资格的人并非叶藏，而是那些最应该爱他，却吝啬地不愿意爱他的人。

“我们长期以来的想法和感受，有一天将会被某个陌生人一语道破。”初读《人间失格》便给我这样一种感受，恍若两个相似的孤魂碎片在这光怪陆离的世界里相遇相拥。以致于在读完后的很长一段时间里陷入阴郁压抑的状态，但同时这种压抑引人深思，思考“生”的意义，最终予人以“生”的启迪。

加缪曾在其随笔《西西弗的神话》中写道：“真正严肃的哲学问题只有一个，那就是——自杀。”也就是说，我们为什么要活着，为什么不能选择自杀。叶藏选择了自杀，因为他活着的时候没能感受到温暖，既然无法与自己和解，那就自我毁灭。而我们活着，是因为我们感受到温暖与爱。当然，从作者的角度看来，既然世界是荒诞的，必然存在一种面对这个世界的态度，因此加缪将其分为三类，第一种态度是肉体上的自杀，既然无法与世界和解，那就以自杀完结。第二种态度是精神上逃避现实，寻求宗教庇护，即精神上的自杀。但依靠自杀这样荒诞的行径摆脱荒诞，显然不能真正解决问题，故加缪所主张的第三种态度，即坚持奋斗，努

力抗争。

在国民自杀率一向偏高的日本，“向死而生”，是根植于日本人生死观中的执念，甚至认为“再没有比死更高的艺术了。”大和民族的基因中，充斥着对悲剧之美的追求，在川端文学里，死具有重要的美学意义。所以日本现代文人中太多自戕之举，芥川龙之介、川端康成、三岛由纪夫等均是此中之辈。以昭和十二年为界，日本战前战后变故太多，日本文明瓦解，国家被迫转型，左翼妥协，普通民众的生命信仰亦遭到前所未有的动荡。于是不抵抗，成了大多数人的选择。作为战后的文学家，他们也许想要唤醒什么，对颓败现状做最后的挣扎，又或许他们自己分明就是被战争摧毁的产物。

在 2013 年中岛美嘉发行单曲《曾经我也想过一了百了》后，日本国民自杀率创历史新低。中岛美嘉在事业如日中天时，患上了咽鼓管开放症，医生给出的诊断结果是：无法治愈。一个歌手辨别不出自己的声音，等同于宣告自己职业生涯的死刑。而失聪的她并没有放弃，用脚打着拍子，嘶吼唱出那首她的真实故事《我曾经也想过一了百了》。歌词末尾：“因为有像你这样的人活在这个世上，我对世界稍微有了期待。”虽然人类的悲喜并不相通，成年人的孤独是悲喜自渡，但我们可以允许自己放声大哭，允许自己任何时候没有来由的丧，同时也要找到救赎支撑我们活下去。

太宰治在《晚年》中的一段话：“我本想这个冬日就去死的，可最近拿到一套鼠灰色细条纹的麻质和服，是适合夏天穿的和服，所以还是先活到夏天吧。”这是身处绝望中的温柔啊。倘若轻易地结束自己的生命，而往后多少柔软美好的时日也终将错过。即使你曾经也想过一了百了，但仍旧希望你再看一看这世间的美好。

生而为人，请一定好好活着！

死に向かって生きる

黄少婷

福建師範大学協和学院

地獄へ行くのに、この世を通る。『人間失格』主人公の葉蔵は困惑しつつこの偽りの世界に連れてこられて、びくびくとまた弱々しくて、技巧で人の歓心を買うことよって自分の本当に存在している温度に触れる習慣がありました。「愛」が何か分からず、それでも絶え間なく愛を探し、本当の自分を探して、最後に世の中はあまりに苦しいと深く悟り、極力自分をこの世の中から消してしまいたいと、死んで地獄へ行くことを選びました。

失格とはつまり、真人間になる資格を喪失することです。偽装、暗黒、墮落、自殺。極限に達したおべっか型人格の世の中の苦しみ、葉蔵の多くの経歴は太宰治と似ています。同様に人生の意味を探し出せず、現実を逃れて、自ら落ちぶれて、最後に自ら滅んでいます。

「自分の不幸は、拒否の能力の無い者の不幸でした。すすめられて拒否すると、相手の心にも自分の心にも、永遠に修繕し得ない白々しいひび割れが出来るような恐怖におびやかされているのでした。」「そこで考え出したのは、道化でした。それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。」人の歓心を求めるため、わざと笑い話を口にして、父の心理に迎合するため、わざと自分の好きでない土産物を選んでいきます。嫌な物事に対して嫌だと言うことができず、好きな物事に対して好きだと言うことができません。まさにこうした「おべっか型人格」のせいで、彼の一生は「恥」に満ちてい

ました。拒否できない人が拒否する勇気を持ってないのは、人間性を恐れるためです。拒否したら自分にどのような害が加わるか分からず、その場で拒絶しないで耐えることによる害は分かっているので、より恐ろしいのです。敏感な人は受動的に相手の困難を見破ることができ、たとえ自分がつらい思いをしても、いくらか分擔しようと常に考えます。得てして敏感な人は事が発生していないうちから自分で苦痛を創造してしまいます。まさに太宰治が『渡り鳥』の中で「余りに感受性の強い人間は、他人の苦痛がわかるので、容易に卒直になれない。卒直なんてのは、これは、暴力ですよ」と述べているとおりです。だから共感力の弱い人は、利己的で明るく幸福で、葉蔵の世の中に対する態度は消極的で悲觀的なのです。彼はささいなことで深淵の中にはまりこんで、自分を救い出すという考えが少しもありません。いわゆる自殺者は死ぬのが怖くないのではなくて、生きることのほうが怖いだけなのです。

葉蔵は「人に好かれる事は知っていても、人を愛する能力に於いては欠けているところがあるようでした」と言っています。幼い時から、葉蔵は家庭と学校から温かみを一度も感じ取ったことがなく、彼は家族と一緒の食事を恐れていました。厳肅な儀式で、ご飯をかき込む顔しか見られなかったからです。彼は生まれつき口数が少なく、場がしらけることを恐れて、いつも率先して笑いで回りを笑わせ、命がけで演技して先生や学友の歡心を買っていましたが、彼らも額面通り受け取るだけでした。実は人である資格を喪失していたのは葉蔵ではなく、最も彼を愛するべきなのに、彼を愛そうとしなかった人々です。

「我々の長い間の考えと所感が、ある日ある見知らぬ人にひと言で喝破された。」初めて『人間失格』を読んだとき、そんな感じがしました。あたかも二つの似ている孤独な魂のかけらが、この奇怪な様相をした世界の中で出会って抱き合うかのようにした。その結果、読み終わった後かなり長い時間、憂鬱で重苦しい

状態に陥りましたが、同時にこのような重苦しさで熟考に引き込まれました。「生」の意味を考え、最後に「生」の啓発となりました。

カミュは随筆『シーシュポスの神話』で、「真に重大な哲学上の問題はひとつしかない。自殺ということだ」と書いています。つまり、我々はどのように生きていて、どうして自殺を選ぶことができないのか。葉蔵が自殺を選んだのは、彼が生きているとき温もりを感じることができなかつたからです。自分とも和解できないからには自ら壊滅するほかありませんでした。我々が生きているのは、温もりと愛を感じられるからです。むろん、作者の角度から見ると、世界はでたらめなので、必然的にある種のこの世界に向き合う態度が存在します。そのためカミュは向き合い方を三つに分類しました。第一種は肉体上の自殺です。世界と和解からには、自殺して終わるといふものです。第二種は精神上での現実逃避です。宗教の庇護を求めるのは、つまり精神上の自殺だとしました。しかし自殺というこれほどでたらめな行為によりでたらめを抜け出すのは、本当に問題を解決することができないのは明らかであるため、カミュは第三種の態度を主張しています。つまり奮闘を続け、努力して抗うことです。

国民の自殺率が高止まりする日本で、「死に向かって生きる」は日本人の死生観に根を下ろした執着であり、「死より崇高な芸術はない」とさえ考えられています。大和民族の遺伝子の中は、悲劇の美に対する追求にあふれています。川端の文学の中で、死には重要な美学的意義があります。そのため日本の近代の文人にはあまりにも多くの自殺例があります。芥川龍之介、川端康成、三島由紀夫などは皆この世代です。昭和十二年を境に、日本は戦前と戦後であまりにも変わりました。日本文明が瓦解し、国は体制変換を迫られ、左翼は妥協し、一般市民の生命の信仰もかつてない動揺に遭いました。そこで抵抗しないことが、大多数の人の選択になりました。戦後の文学者らも何を呼び覚まそうとし、衰

徴する現状に対して最後のあがきを見せましたが、彼らは自分が戦争の粉砕による産物だと自覚していたのかもしれませんが。

2013年中島美嘉がシングル「僕が死のうと思ったのは」をリリースしてから、日本の国民の自殺率は歴代最低となりました。彼女は仕事が真っ盛りの時に耳管開放症を患い、治癒できないと診断されました。歌手が自分の音を聞き分けられないということは、キャリアにおける死刑宣告も同然です。聴覚を失っても彼女は諦めず、足で拍子を取って、全力で歌った真実の物語が「僕が死のうと思ったのは」でした。その歌詞の終わりには「あなたのような人が生きてる、世界に少し期待するよ」とあります。人類の悲しみ喜びが決して通じ合っておらず、大人の孤独は悲しみ喜びが自分にしか分からなくても、自分に号泣を許し、いつでも意気消沈することを許して、同時に救いを見つけ出し自分を支えながら生きていくことはできます。

太宰治の『晩年』に、「死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であった。鼠色のこまかい縞目が織りこめられていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生きていようと思った」というくだりがあります。これは絶望の中のやさしさですよ。もしも簡単に自分の生命を終えるならば、それからのどれだけの柔らかくすばらしい時間も絶対に逃してしまいます。たとえ何もかも終わりにしようと思ったことがあっても、なお、再びこの世の中のすばらしさを見られるよう望んでいます。

人として生き、必ずしっかりと生きていてください。

-
- ① 太宰治『人間失格』、何青鵬（訳）、現代出版社、2016
 - ② アルベール・カミュ『シーシュポスの神話』、李玉民（訳）、天津人民出版社、2018
 - ③ 太宰治『晩年』、朱春育（訳）、重慶出版社、2013

孤独的“陪跑者”



王施施

复旦大学

笹川杯作文コンクール 2019 年度一等奖

从 2006 年起，村上春树便是诺贝尔文学奖候选名单上的常客了。只可惜，这么多年却总是与大奖落寞擦肩：即便 2017 年的诺奖花落这一衣带水的友邦，于村上春树而言，不过又是一场赔率尴尬的“陪跑”。

虽然不受诺奖钟爱，其在国内的知名度却丝毫不亚于川端康成等诺奖“宠儿”：提起日本作家，村上春树总是能名列前茅，所吸引的忠实粉丝恐怕也是有过之而无不及。对于国人而言，村上春树就仿佛是在水之湄的“王小波”，像极了一座造型奇诡的灯塔，不自觉地牵引着躁动而不安的灵魂；又像是时刻准备敞开怀抱的学校，以超脱而决绝的坦诚安放一代代年轻人漂泊、动荡的青春年少。

在中学老师和家长的眼里，村上春树的作品似乎不是多么有益的“补品”，甚至是谈之色变的“禁书”。但这并不妨碍它成为青少年心头的“朱砂痣”。犹记得初中的时候，我有个要好的朋友——一个勇敢而有着奇妙幻想的姑娘，温婉的外表下蛰伏着强而有力的灵魂，像一只小兽般随时准备亮出稚嫩的利爪；而那本小小的《挪威的森林》就像是《红楼梦》中的《西厢记》，不仅惹得

她手不释卷，也是她向庸常生活宣战的旗帜。

如果说川端康成是典型的日本本土作家，澄澈、清冽而又温情脉脉；村上春树则更像一个沉默的“反叛者”。尤其是其前期的作品，往往显得不那么“日本”，带着对欧美作家的致敬，村上春树恰似手执舶来的手术刀对着熟悉的社会冷峻地抽丝剥茧，其所反映的意识和自觉也让不同时空、语言、肤色的读者都可以找到一面关照自身的“镜子”，不可抑制地产生共鸣。

村上春树的笔下鲜少有惊天动地的英雄，或是澎湃人心的传奇，而多是在生活中与我们匆匆擦肩、面目模糊的普通人。这些角色从来不曾臻于完美，懦弱、自私、无知、甚至不那么道德，在生活的漩涡之中打转、在百无聊赖的欲念中沉沦，像极了庸常的你我。

而这些角色最为突出的一点便是“孤独”。可以说孤独一直是村上春树小说的母题，“人生来便注定会失去一切，消失，完全地消失于虚无，从入口进来，从出口出去”，“城市依序消失，是的，这里没有我的位置”、“哪里会有人喜欢孤独，不过是不喜欢失望罢了”……不论是渡边、天吾、多崎作、卡夫卡，还是初，每个人都在时代洪流的裹挟之下，于困惑和挣扎中思考着自我和他人、个人与社会的关系。虽然每个独立的故事里，主角们被冠以不同的名姓、各异的背景、多样的社会关系，但热切而恣肆的孤独却始终像一堵高墙，隔开他们无比充沛的精神世界与喧嚣热闹的世俗生活。

孤独来源于自我意识的觉醒，明白人与人之间无可奈何的隔阂，了然归根结底每个人都只是孤身一人。所以，与其说是小说，是墨笔铅字上的纵横捭阖，不如说更像披着虚幻情节外衣的个人独白，而发声者既是作者，也是我们每一个人。

孤独的滋味并不好受，像是溺水，让人愤怒而绝望，悲戚且自怜，英国诗人约翰·多恩曾在贫病交加中呻吟“没有人是一座孤岛”，萨特则嗔笑道“他人即地狱”；可一贯深居简出、沉默寡言

的村上春树却说“孤独一人也没关系，只要能发自内心地爱着一个人，人生就会有救。”

这从不曾百分百绝望的心情似乎又是非常“日本”的。似乎没有比日本人更懂得、也更在乎心灵羁绊的人。知乎上有一个热门的讨论话题“为什么日本人如此冷漠，却可以制作出大量感情丰富的动漫？”也许，这一设问的前提便是错误的，正如同为日本作家的太宰治所言“太敏感的人会体谅到他人的痛苦，自然就无法轻易做到坦率”，恰恰因为习惯为他人着想，让他们像刺猬一般无法天真而光明地自私着、幸福着。日本人从来不是真正的冷漠，克制而疏离的外壳之下，流淌的是细腻而敏锐的真诚。

与加缪的《局外人》、黑塞的《荒原狼》、太宰治的《人间失格》不同，正是这种对自我的克制和激流暗涌的温情，让村上春树的作品不涩口得多。而人生路上的村上春树，同样不只是冷眼旁观的局外人、徒劳无功的“陪跑者”，恰恰是作为平凡而可贵的普通人，一直不知疲倦地奔跑在路上；虽然大器晚成，29岁才开始创作，却笔耕不辍，长达四十余年；从1982年秋就开始跑步，每天十公里……

人生总是孤独而迷茫的，这片广袤无垠、亘古不变的星河曾千百万年地见证过同样的情绪在一代又一代的人身上上演，何曾相似的面孔、多么熟悉的心路历程，或许唯一的区别就是他们手上捧着的是《少年维特之烦恼》，还是《麦田的守望者》。我们这群手捧村上春树小说、不被看好的一代，似乎终于也都平安而朝气蓬勃地长大了，学会不情绪化，不偷偷想念，做“一个不动声色的大人”。而在人生这趟无返程的高速列车上，村上春树所言传身教教会我们的：或许就是带着疑问尽情地舞蹈，在凶顽的世界中孤独而倔强地努力着，热切又冷峻地期待重新相逢。

孤独の「伴走者」

王施施

復旦大学 法学院

2006 年から、村上春樹はノーベル文学賞の選挙候補者リストの常連です。惜しむらくは、これほど長年いつも受賞を逃し、肩を落としています。たとえ 2017 年のノーベル賞がこの一衣帯水の友好国に渡っても、村上春樹にはオッズの具合が悪い「伴走」に過ぎません。

ノーベル賞には愛されないものの、その中国での知名度は川端康成らノーベル賞「寵児」に少しも劣りません。日本の作家とえば、村上春樹はいつも上位にきて、引きつける忠実なファンも恐らく勝るとも劣らないでしょう。中国人にとって、村上春樹はさながら水のほとりの「王小波」です。造型の奇怪な灯台のように、せわしく動く不安な魂を無意識に牽引するので、またいつも懐を開こうとしている学校のようにも、自由闊達できっぱりとした誠実さが、その時その時の若者の漂流し揺れ動く青春に置かれています。

先生や親の目には、村上春樹の作品はさほど役に立つ「栄養食品」ではないようで、話題にすると血相を変える「禁書」のことさえもあります。しかしそれでも村上作品が青少年の胸のうちで『朱砂痣 [京劇の名作]』になる障害にはなりません。確か中学の頃、仲の良かった友達に、勇敢で面白い幻想を持つ女の子がいました。おとなしい外見の下に力強い魂が眠っており、小さな獣がか弱い爪をいつでも出せるように構えているかのよ

うでした。そしてかの小さな『ノルウェイの森』は『紅樓夢』の中の『西廂記』のように、彼女の手放せない愛読書であるとともに、彼女が平凡な生活に宣戦する旗幟でもありました。

川端康成が典型的な日本本土の作家で、清く澄み、清冽でまた愛情がこもっていると言うならば、村上春樹はむしろ無口な「裏切り者」のようです。特にその初期の作品は、得てしてそれほど「日本」ではなく、欧米の作家への敬意を帯びているように見えます。村上春樹はあたかも舶来のメスを手によく知っている社会に対して冷やかに糸を繰り繭をむくようで、その反映した意識と自覚から、違う時空、言語、皮膚の色の読者が自身を映す「鏡」を見つけられ、共鳴が生じるのを抑えられません。

村上春樹の作品には驚天動地の英雄、あるいは激しくぶつかり合う人の心の伝奇などはほとんどなく、生活の中で私たちと慌ただしくすれ違う、顔の印象もない一般人ばかりです。そうした役柄はこれまで完璧だったことがなく、臆病、利己的、無知で、あまり道徳的でないことさえあり、生活の渦の中でぐるぐる回り、退屈きわまりない欲望にはまりこんで、とても平凡な自分たちのようです。

彼らの最も際立っている点は「孤独」です。孤独がずっと村上春樹の小説のテーマで、「入り口からは出られないし、出口からは入れない。それは決まっているのだ。人々は入り口から入ってきて、出口から出ていく」、①街が順に消えていく。そうだ、ここに僕の場所はない②「孤独が好きで人間なんていない。失望するのが嫌なだけだ」③……ワタナベ、天吾、多崎つくる、カフカ、ハジメの誰もが、時代の流れに巻き込まれながら、困惑と必死の頑張りの中で自己と他人、個人と社会の関係を考えています。それぞれ独立した物語の中で、主役たちはそれぞれ違う名前と背景、さまざまな社会関係を与えられていますが、切実でわがままな孤独はずっと高い壁のように、彼らのこの上な

く満ちあふれている精神世界を騒がしい俗世間の生活と隔てているのです。

孤独は自我意識の目覚めから生まれて、人と人の間のどうしようもない隔たりを理解し、結局すべての人が独りぼっちなのだとはっきり分かるものです。なので、小説、文字上の弁舌と言うより、むしろフィクションという上着を羽織った個人の独白だと言う方がしっくりきます。声を出しているのは作者であり、私たち一人一人でもあります。

孤独の味は良いものではなく、溺れるかのように、人は憤怒して絶望、悲惨で自分を哀れむものです。イギリスの詩人ジョン・ダンが貧しさと病いにさいなまれる中で「なんびとも一島嶼にてはあらず」と呻き、④ サルトルは怒って笑いながら「地獄とは他人のことだ」と言っています。しかし一貫して実社会に触れずにいることができる寡黙な村上春樹は「一人でもいいから、心から誰かを愛することができれば、人生には救いがある」と言っているのです。⑤

この 100% の絶望をしたことのない心情はまた非常に「日本」的なようです。日本人よりも心の束縛を理解し気にかける人はいないようです。知乎〔中国の Q&A サイト〕で大人気の討論テーマに「どうして日本人はこれほど冷ややかなのに、感情の豊かなアニメを大量に作りだすことができるのか」というものがあります。この設問の前提は誤っていて、まさに太宰治の言葉のとおり「余りに感受性の強い人間は、他人の苦痛がわかるので、容易に卒直になれない」のかも知れません。⑥まさしく他人のためを考えることに慣れているため、彼らはハリネズミのように無邪気に明るく利己的に、幸せになることができません。日本人はかねてから本当に冷ややかなのではなくて、抑制し疎遠になる殻の中に流れるのはきめ細かく鋭い誠実さです。

カミュの『異邦人』、ヘッセの『荒野のおおかみ』、太宰治の『人

間失格』の違いは、まさにこうした自己の抑制と激流に対してひそかに湧く温情により、村上作品は言葉を省けているということです。人生の道中の村上春樹も同様に、部外者を静観するだけではなく、むだ骨を折る「伴走者」です。まさしく平凡で貴い一般人が、ずっと疲れを知らず道を駆け回っているのです。大器晩成とは言うものの、29歳でようやく創作を始め、文筆の仕事をして40数年も続ける彼は、1982年秋から走り始め、毎日10キロ……

人生はいつも孤独で茫漠としています。この果てしなく広く、昔から変わることのない銀河は、長らくその時その時の人演じる同じような情緒を見届けてきました。どうして似たような顔、あまりにもよく知られた心理の変化する過程なのか。もしかすると唯一の違いは彼らの推す作品が『若きウェルテルの悩み』なのか、『ライ麦畑でつかまえて』なのかだけなのかもしれません。村上春樹の小説を推し、先行きを案じられている私たちの世代もまた、ついには同じく無事はずつと成長して、感情的にならないことをマスターして、こっそりと懐かしむことなく、「顔色ひとつ変えない大人」になってしまいます。^⑦人生というこの帰路のない高速列車の上で、村上春樹の言葉が教えてくれるものは、疑問を持ちつつ思いきり踊って、凶暴で頑迷な世界の中で孤独にひるまず努力し、切にまた冷やかに再びめぐり会うことを期待することなのかもしれません。

-
- ①村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』
 - ②村上春樹『国境の南、太陽の西』
 - ③村上春樹『ノルウェイの森』
 - ④ジョン・ダン『誰がために鐘は鳴る』
 - ⑤村上春樹『1Q84』
 - ⑥太宰治『渡り鳥』
 - ⑦村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』

向死而生与物哀之美： 东野圭吾笔下的“罪”与“命”



李宜萱

暨南大学海外华人文学

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

对社会问题与人性黑暗面的关注一直以来都是日本推理小说的重点，但与其他本格派推理小说家不同的是，比起诡计而更看重疼痛的东野圭吾，“他写人性中的爱情、亲情、友情，写人性被扭曲之后的种种异相，也写那种生而为恶的反社会人性。”自从鲁思·本尼迪克特的《菊与刀》问世以来，海内外学者对于日本文化就有了一种获得了大多数认同的概括，即“耻感文化”，但东野作品对于疼痛的关注，主要体现在对幽微人性的挖掘，而这些被袒露在读者眼前的人性阴暗面，其内核就是一种结合了宿命论观点的原罪意识。

二战后作为战败国的日本在政治与文化上都受到了来自西方社会近似侵略的猛烈冲击，新旧伦理观念碰撞得火花四溅，也许正是因为对这些变化的亲身经历，才使得伦理观在东野圭吾作品中复杂且复合——在他的笔下，施害者往往也是受害者，那些惨淡真相背后又揉入了些许温情，恶人的善意与善人的恶意反复碰撞，正义与罪恶也总是交织在一起。《白夜行》中的桐原亮司和唐泽雪穗，《幻夜》中的水原雅也和新海美冬，《圣女的救济》中

的凌音，《大雪中的山庄》中的麻仓雅美等，他们无一不是在实施犯罪的同时也是另一场罪孽中的受害者；或者说，正是因为他们曾经的受害才导致了他们后来的罪行。在其作品的世界观里，“罪”就是“命”，“命”也是“罪”。宿命是原生的，是不可更改的，因为人无法预知自己的遭际；但如何去接受命运，如何去承担或是面对，却是能够选择的。对于东野而言，即便接受了西方“罪感文化”对于人性本恶的设定，也不会全然相信人性内在自省的效力。因为“罪”是“命”，所以在他所描绘的日本社会里，如果外在的审判没有到来，施加罪行的人会一直选择逃避，而外在审判到来的时候，却往往不能够彻底解决问题。因为“命”也是“罪”，所以正义在东野圭吾的笔下是如此苍白疲软，有时迟到，有时缺席。

人性本恶注定悲剧的宿命，对这样的观点，东野似乎深以为然，却又不肯放弃对人性尚存善意的希望，一桩恶行也可能包裹着善意。诚然，在其作品中不乏救赎与自我救赎的尝试，但起因并非“罪感文化”中自发的，由心而生的道德感与愧疚感，而是饱尝了人间冷暖，受尽了侮辱孤寒后的挣扎。刘小枫将在世态度分为三类：基督教为代表的宗教解救态度，以古典儒家为代表的道德形而上学态度和以道家与禅宗为代表的审美超脱态度。比起自知有罪而受到内心审判而产生的救赎行为，以及纯粹的“乐感文化”中自由无碍的逍遥境界，或是积极入世的道德形而上学价值观，东野对悲剧命运的理解和对抗方式十分复杂——首先，他认为人生而有之的劣根性和阴暗面导致了不可摆脱的宿命悲剧；其次，无论人是否接受现存的世界，都必须且无可避免地去面对自己绝望的命运，祈祷是不能解决任何问题的，人必须尝试解救自己；最后，惨淡与残酷是普遍存在的，自我救赎与对他人的救赎十分有限，正义并不总是会如期而至。

我们不能因此就认定东野对于人性，或人抗争宿命的可能性持悲观的态度，毋宁说其呈现出来的“悲观”，是日本传统美学中

的“物哀”，即主体与客体间的共情，“哀”并不特指悲伤的情绪，而是指代所有能由外界而自然生发的感情。倒不如说他惯于将人性的暗点放在阳光下解剖，将虚伪、欺骗、贪婪、嫉妒、自私、暴力、冷漠全部摊开，赤裸裸地暴露在日光与目光之下，以悲剧和丑恶带来的巨恸去撞击人心。他不相信道德伦理或是祈祷忏悔能够救赎人的灵魂与肉体，也鄙弃消极避世的态度，而是宁可让现实被抠挖得血肉淋漓，以期求这种惨烈能够换来人们对于自我、社会等各方面的重新审视与再寻出路——唯有接受、面对、抗争，才能终获解脱。

孔子说“未知生，焉知死”，活着的事情尚未搞明白，就难以去理解死亡的世界。海德格尔却说“向死而生”，从死亡的无限中去寻找生的可能，去证明存在的价值。与孔子、海德格尔都不一样，佛家总说“念”：一念生，一念死；一念未灭，不可成佛。都说“人死如灯灭”，是不可停留的刹那，死了即死了，是完成时态，人怎么可能留住死亡的脚步，使之成为进行时态呢？《沉睡的人鱼之家》探讨了普通人很少会考虑到的“脑死亡”和“心脏停跳”之别，就是东野寻求宿命解脱的方向——生与死的界定，往往就在一念之间，他把这个问题小心翼翼地捧在手里交出来，试图使我们相信死亡不是瞬间，不是终结，也不是彼岸。生命是条环线，更接近于一个莫比乌斯环——充满了相对性与转折，分列于两面的“生”与“死”看似永远不相交，却总能在某个关口彼此照见。正因为“死”的与否则存在于人的“起念”，所以唯有从内心真正地去接受“死”，它才能如期而至。就像是人的“罪”与“命”之交缠，只有真正地面对、接受，经历了对宿命的彻悟，才能够获得永久的解脱。

【日本語訳】

死に向かって生きるのともものあはれ—— 東野圭吾の描く「罪」と「運命」

李宜萱
暨南大学海外華人文学

社会問題と人間の暗い側面に焦点を当てるのは、いずれも日本の推理小説作家の特徴ですが、他の本格派推理小説家と違ってトリックより痛みを重視する東野圭吾は、「人間の本质にある愛、親心、友情、それが歪んだ後の様々な異常、そして悪に生まれた反社会的人間の本性について書いている」のです。ルース・ベネディクトの『菊と刀』が世に出て以来、国内外の学者が日本文化の一般論として大筋認めるものの一つが「恥の文化」です。しかし、東野作品の痛みに対する関心は、主に人間の暗部を発掘し、それを読者の眼前にさらけ出すことにあります。読者に提示される人間の暗部の核心となるのは、宿命論と結びついた原罪意識です。

戦後、敗戦国の日本は、政治と文化の両面で西洋社会からの侵略にも似た猛烈な衝撃を受け、新旧の倫理の観念が火花を散らしました。東野圭吾の作品において倫理観が複雑なのは、こうした変化を彼が個人的に体験しているからかもしれません。

彼の作品では、加害者は得てして被害者であり、うす暗い真相の背後にはささやかな温もりがあります。悪人の善意と善人の悪意は繰り返しぶつかり、正義と罪悪は絡み合っています。『白夜行』の桐原亮司と唐沢雪穂、『幻夜』の水原雅也と新海美冬、『聖女の救済』の綾音、『ある閉ざされた雪の山荘で』の麻倉雅美な

ど彼らは皆、犯罪を犯したのと同時に、別の犯罪の被害者です。あるいは、彼らのかつての被害こそ、のちの犯罪を招いています。作品の世界観の中で、「罪」は「運命」で、「運命」が「罪」でもあります。宿命は生まれつきの、変えられないもので、人は自分の境遇を予知することができないためです。ですが、運命をどう受け入れ、どう引き受けあるいは直面するかは選ぶことができます。東野は、西洋の「罪の文化」を受け入れてはいても、人間の自己反省のもつ力は信じていません。東野が描く「罪」は「運命」という日本社会の中では、外的な裁きがない限り、犯罪者は逃げることを選びます。しかし、罪人を裁いたとしても根本的には問題を解決したことにはならないのです。「運命」は「罪」であるため、東野作品では、正義はこのように青白く非力で、遅れてやってきたり、ときに不在だったりします。

東野は、「人間は本質的に悲劇を運命づけられている」という視点に同意してはいるものの、人の本質には善があり、悪は善で包むことができるという希望を捨てたわけではありません。たしかに彼の作品では、登場人物たちの救済や自己救済の試みが多く見られますが、「罪の文化」の中で登場人物たちが自発的に道徳や罪を意識して救いを求めているのではなく、救済は世の中の冷たさや屈辱を味わった後の葛藤から生まれるものなのです。劉小楓は、生きることの態度を三種類に分けています。キリスト教を代表とする、宗教が救うという態度、古典儒家を代表とする、道徳的、形而上学的な態度、道家と禅宗を代表とする、美醜を見分ける自由闊達な態度です。罪の認識という内なる裁きから生じる救済行為、純粹な「快樂文化」の自由奔放さ、あるいは世界への積極的なイニシエーションという道徳的で形而上学的な価値観と比べ、東野の悲運に対する理解と向き合い方は複雑です。まず、人間の生来の劣等感や暗部が、逃れられ

ない運命の悲劇をもたらすと東野は考えています。次に、人は現存する世界を受け入れるかどうかに関わらず、自分の絶望の運命に直面することは避けられません。祈りではいかなる問題を解決することもできず、人は必ず自分の救済を試みなければなりません。最後に、不幸と残酷さは普遍的で、自己救済や他者の救済はほんの少ししか達成されず、正義は必ずしも思い通りにならないという考えです。

東野が人間の本质や運命への人間の抵抗の可能性を悲観しているとは断言できません。彼の描く「悲観」は、日本の伝統的な美学が持つ「もののあはれ」、つまり、主体と客体の間の共感であると考えられるべきでしょう。「あはれ」は決して悲しい情緒を特に指したのではなく、外界に代わり自然と発生するすべての感情を指すものです。むしろ、彼は人間の本性にある偽善、欺瞞、嫉妬、利己主義、暴力、無関心といった暗部を白日の下にさらし、悲劇と醜さがもたらす嘆きを描くことで、人々の心を動かしているのです。彼は道徳的な倫理あるいは祈りや懺悔が人の魂と肉体を救えるとは信じません。受け身や回避の姿勢をとるのではなく、むしろ現実と対峙し、陰惨な状況と引き換えに人々が自分や社会の側面を見つめ直し、出口を探すことを期待しています。――受け入れ、向き合い、戦うことによるのみ、最終的に解放されるのです。

孔子は「未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らん」、生きることについてもよく分かっていないのに、死についてなど分かるはずもないと説いています。しかしハイデガーは「死に向かって生きる」、死の無限さの中から生の可能性を探して、存在の価値を証明すると説いています。孔子、ハイデガーいずれとも異なって、仏教では「念」、一念〔一瞬〕の生、一念の死、一念未だ滅さざれば、成仏すべからずと説いています。いずれ「人の死すこと灯の滅するが如し」でと言われるように、死は止めることのできない瞬間

です。死んだと言えれば完了形であり、死の足どりを引きとめ、現在進行形にすることはできません。『人魚の眠る家』で東野は一般人が考えることの少ない「脳死」と「心停止」の違いを探っていますが、これはつまり東野が求める宿命の解脱の方向、生と死の境界づけです。彼はこの問題を差し出すことで、死は一瞬でも、終焉でも、彼岸でもないかと読者に納得させようとしています。生命は螺旋で、メビウスの環により近く、相対性と転換に満ちています。対極にある「生」と「死」は永遠に交差しないように見えますが、ある時点で必ず交差します。「死」の存否が人の「着想」にあるため、ただ内心から本当に「死」を受け入れてこそ、期限どおりに訪れます。人の「罪」と「運命」がもつれ合うように、ただ本当に向き合い、受け入れ、宿命に対する悟りを経験してこそ、永久の解脱が得られるのです。

-
- i 麦小麦、「東野圭吾の七個キーワード」、書城、2018(02)、73-81。
東野圭吾『白夜行』、南海出版社、海口、2015:521
イアン・ブルマ『近代日本の誕生』、1853-196、四川人民出版社、成都、2018
ルース・ベネディクト『菊と刀 日本文化の型』、商務印書館、北京、2016
東野圭吾『幻夜』、南海出版社、海口、2009
劉小楓「拯救与逍遥」、華東師範大学出版社、上海、2011:30
東野圭吾『容疑者Xの献身』、南海出版社、海口、2010
東野圭吾『悪意』、南海出版社、海口、2009
東野圭吾『聖女の救済』、当代世界出版社、北京、2010
東野圭吾『ある閉ざされた雪の山荘で』、北京十月文芸出版社、北京、2017
湯錦花「論東野圭吾推理小説中の多元倫理観」、広西民族大学、2016
東野圭吾『人魚の眠る家』、北京聯合出版社、北京、2017

病隙，闲看一个人的好天气



杨志涛

北京大学核技术及应用专业

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

——读青山七惠《一个人的好天气》

秋来了，暑热尚未消退，然而早晚温差明显加大。昨晚整宿疲软烧灼、辗转反侧，我知道，它又迈开了摧残万物步伐。告了一天假，一个人去医院，一个人挂号、排队、看病、拿药、喝水、服药、睡觉，醒来还是一个人。室友回家了，爸妈远在千里之外，同学和朋友都忙碌在自己的轨道上，我其实是不想因为一点小事打扰任何人。这个过程，像极了书中的老太太荻野吟子，安静地蜷缩在一个角落完成自我的愈疗。

18 至 34 度，空气质量指数 24，今天真是一个好天气，窗外的阳光洒进来落在书桌上，然后从桌面向地面缓慢地移动，时间在这种空空如也的状态下流走。清淡的晚饭后，恢复了不少往日的精神和气力。很早就看到了征文公告，跃跃欲试却又言不知何起，这种感觉，像极了书中的知寿在笹冢站初遇藤田时的砰然心动与手足无措。既然今天的好天气与书中的好天气撞了个满怀，高度契合的氛围浑然天成，那就正好提起笔写点什么。

既简单又复杂，既明媚又忧郁，既纯洁无暇又邪魅狂狷，你的名字就叫日本。实话实说，我接触的日本文化并不多，但是见微

知着，从看过的日本文学影视作品中，我感觉似乎每一个年龄阶段的人都能在其中找到对应的精神皈依：十岁上下的孩子在宫崎骏的童话世界中嬉笑打闹，十五六岁的少年在新海诚的魔幻现实中伤春悲秋，二十岁左右的青年在村上春树的挪威森林中悲欢离合，三四十岁的中年在川端康成的雪国秘境中意乱情迷，凡此种种，不一而足。无论哪个年龄阶段，物哀审美下的孤独与成长似乎是这些文学影视作品一致的立意。作者青山七惠在创作这部作品的时候正值二十岁出头，这部作品的主人公正值二十岁出头，我也正值二十岁出头，三个生命中最美好的年纪的相逢，与其说是巧合不如说是缘分。更巧妙的地方在于，书中安排了七十岁出头的荻野吟子与二十岁出头的三田知寿相处于同一个屋檐之下，青葱与迟暮有时是和谐的交响，有时是鲜明的对比。

这部短小而清新的作品从主人公三田知寿的视角展开，一瞥新千年之后日本年轻一代的一种比较普遍的生命状态，这种生命状态的主题是孤独与虚无。一直认为马尔克斯已经把生命的孤独写得淋漓尽致了，但是青山七惠却于细微处用孤独轻轻触碰到读者脆弱而敏感的神经。吟子生病后独自安静地躺了四天直至病愈，在这里我看到的更多的是顽强；知寿癖好悄悄偷走并暗自收藏别人的小对象，在这里我看到的更多的是孤独；吟子在去参加老年舞会前一定会穿着打扮得整洁漂亮，在这里我看到更多的是体面；知寿喜欢在吟子面前装作不经意地炫耀自己光滑的皮肤和精致的妆容，在这里我看到的更多的是虚无；吟子在一餐一饭、一来一往中恬淡经营着与芳介老先生的黄昏恋情，在这里我看到更多的是尊重；知寿在结束了与阳平若即若离的恋爱关系之后很快又与新男友藤田走到了尽头，在这里我看到的更多的是孤独；吟子是没有子女也很少有朋友的独居老人却生活地有声有色，在这里我看到的是鲜活；知寿与母亲感情淡薄、不愿学习深造而打临时工，在这里我看到更多的是虚无。

新闻偶尔报导，在当代日本，人口老龄化、年轻人低结婚率、

社会少子化等问题日益严重。日本宅文化盛行，越来越多的年轻人更愿意在虚拟世界中排解孤独、在短暂的肉体欢愉中填补虚无，而不愿意在现实世界中结交朋友，尤其使建立稳定的亲密关系。反观中国，这种孤独感和虚无感也正在年轻群体中扩散，与其说这是来自邻国日本的传染，不如说工业化、信息化和经济发展到一定程度之后的社会都会从内部滋生出相似的困境。在我看来，年轻人这种孤独与虚无，直接原因是不能承受的生活之重，诸如固化的社会阶层、压缩的晋升空间、繁重的工作压力，根本原因其实是不能承受的生命之轻，因为健康靓丽的年轻身体、肆意挥霍的旺盛精力、理所当然的外界关怀。在凝望深渊的时候深渊也在凝望我，作为年轻人，我偶尔也会陷入这种没有过去、沉醉当下、不计未来的生命之轻中。

小病提神，处于现在这种将愈未愈的间隙之中，我感觉我开始打破这种生命之轻了。当不再翻腾的肠胃可以欣然接纳软糯的米粥时，我感受到了一粥一饭的不易；当不再灼烧的皮肤可以亲密接触棉质的被褥时，我感受到了一丝一缕的珍贵；当不再短促的呼吸可以均匀呼吸优质的空气时，我感受到了一动一静的和谐；当不再肿痛的喉咙可以轻松哼唱熟悉的旋律时，我感受到了一词一曲的美妙。在这种转变中，书中的孤独和虚无得到了净化与升级：我一个人吃饭、一个人睡觉、一个人阅读、一个人思考、一个人学习、一个人运动，其实是在孤独中成长、在虚无中进步，只为了使一个更加优质的我，与一个同样优质的你，在更加优质的生活中相遇。

青春的迷茫期就像经历一场重感冒，到底还是要靠自身的免疫力战胜一切的，愈疗的过程才是真正的一个人的好天气。

病床のつれづれに『ひとり日和』を読んで ——青山七恵『ひとり日和』を読んで

楊志涛

北京大学 核技術及应用専攻

秋が来ても、真夏の暑さがまだ消えていませんが、朝晩の温度差は明らかに大きくなっています。昨晩は夜通しだるくて熱があり、寝付けず何度も寝返りを打って、万物を壊す足並みが進んだのだと知りました。一日の休みを申請して、一人で病院に行き、診療を申し込んで、並び、診察を受け、薬を受け取り、水と薬を飲んで眠り、起きてもまだ一人でした。ルームメイトは帰ってしまい、両親は遠くにおり、友達は自分のことで忙しいので、実のところ私は小さな事で誰の邪魔もしたくなかったのです。この過程は、作中のおばあさん荻野吟子が静かに片隅で縮こまって療養する様子にそっくりでした。

18~34 度、空気品質指数 24、今日は本当に良い天気です。窓の外の日光が机の上にこぼれ落ち、そこから床へとゆっくり動いて、時間はこうしたすっからかな状態の下で流れていきます。あっさりした夕飯の後、以前の精神と力がかなり回復しました。早くにコンクールの公告を見ており、気持ちがおはやるのに何から言おうか分からないこの感覚は、作中の知寿が笹塚駅で初めて藤田に会ったとき急に心が動いて周章狼狽する姿のようでした。今日の良い天気と作中の良い天気がぶつかって胸にあふれ、ぴったり合う雰囲気は渾然として天の成せるもの。何か書き始めるのにちょうどです。

簡単にして複雑、美しくて憂鬱、完全純潔にしてダークな魅力を持つ、その名は日本。本当のことをありのまま言うと、私の触れた日本の文化は決して多くありませんが、そこから全容を見通すと、見たことがある日本の文学、映像作品の中から、ほぼすべての年齢層の人が精神を帰依する対象を見つけられるように感じます。10歳ぐらいの子供は宮崎駿の童話の世界の中ではしゃぎ、15～16歳の少年は新海誠の幻想的な世界の中で感傷にひたり、20歳ぐらいの青年は村上春樹の『ノルウェイの森』の変転浮沈を味わい、30～40歳の中年は川端康成の『雪国』で秘境に迷い込み、同様の事例には事欠きません。どの年齢層かを問わず、もののあはれの美学における孤独と成長が、これらの文学、映像作品の一致する構想のようです。作者の青山七恵がこの作品を創作したのはちょうど20歳あまり、この作品の主人公も私もちょうど20歳あまりで、三つの生命の中で最もすばらしい年齢のめぐり合いは、偶然の合致と言うよりむしろ縁なのです。さらに巧みなところは、作中で70歳あまりの荻野吟子が20歳あまりの三田知寿と同じ屋根の下に配され、若い時期と老境の調和がとれていて、時には鮮明な対比を見せていることです。

この小さく清新な作品は主人公、三田知寿の視点で展開されており、ミレニアム以降の日本の若い世代の割と普遍的な生態がちらりと見えます。その生態の主題は孤独と虚無。生命の孤独はすでにマルケスが書き尽くしたとずっと思っていました。青山七恵は細かいところに孤独を用いて、読者の脆弱で敏感な神経にそっと触れてきます。吟子が病気に罹った後、独りで治るまでの四日間安静に横たわっている描写で、粘り強さのほうが多く伝わってきました。知寿はこっそりと他人の小物を盗んで収集する癖がありますが、そこからは孤独のほうを感じられます。吟子は老年の舞踏会に参加する前に必ず身なりを

きれいに整えており、体面が見いだせます。知寿は吟子の前で気付かないふりをして自分のすべすべな皮膚と精致的な化粧を誇示することを好んでおり、そこからは虚無のほうが見られます。吟子は食事の都度、繰り返し芳介先生へのたそがれの慕情を処理していますが、そこには尊重のほうが見られます。知寿は陽平との半端な恋愛関係を終えた後すぐにまた新しい男友達の藤田と果てまで歩いていますが、そこからは孤独のほうを感じられます。吟子は子供がおらず友達も少ない一人暮らしの老人ですが生活は生き生きとしており、みずみずしさが感じられます。知寿と母親は感情が薄く、深く学ぶことをよしとせずアルバイトを選びますが、そこからは虚無のほうが見られます。

たまたまニュースにありましたが、今の日本では、高齢化、若い人の低い結婚率、社会の少子化などの問題が日に日に深刻だそうです。オタク文化が盛んで、多くの若い人が架空の世界中で孤独を紛らわすことを望んでおり、短い肉体的な喜びの中で虚無を埋めて、現実的な世界の中で友達と付き合おうと思わず、特に安定した親密な関係を築こうとしなくなっているとのこと。反対に中国を見ると、この種の孤独感と虚無感は若い層にも拡散しています。これは隣国の日本から伝染したというより、工業化、情報化と経済がある程度まで発展した後の社会は内部から似かよった苦境を引き起こすのでしょう。思うに、若い人の孤独と虚無を生む直接の原因は耐えられない生活の重さです。たとえば固定化された社会階層、圧縮された昇進の余地、重い仕事のストレスなど。根本的な原因は実は耐えられない生命の軽さで、健康で美しく若い身体、思う存分金銭を浪費する旺盛な精力なら、当然として外へと関心が向きます。「深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ」。若い私も過去をなくし、目先に酔いしれて、未来を考えない生命の軽さに陥ることがあります。

ちょっとした病気になって元気を回復させるまでの隙間で、私は自分がこうした生命の軽さを打ち破り始めたと感じています。胃腸が落ち着き喜んでもち米のおかゆを受け入れられるようになったとき、食べ物のありがたさを感じました。皮膚がひりひりしなくなっって綿布団にぴったり触れるようになったとき、糸一本一本の貴重さを感じました。呼吸が短くならず平均的に良質な空気を呼吸できるようになったとき、挙動の調和を感じました。喉の腫れが引いて鼻歌を歌えるようになったとき、歌のすばらしさを感じました。このような転換の中で、作中の孤独と虚無が浄化され進化しました。一人で食事して、寝て、本を読んで、考えて、学んで、運動するのは、実は孤独の中での成長、虚無の中での進歩です。より優れた自分になり、同じく優れた貴方と、よりより優れた生活の中で出会うためだけに。

青春の困惑する時期は重い風邪を経験するようなもので、結局やはり自身の免疫力に頼って一切に打ち勝つのです。療養の過程こそ本当のひとり日和でした。

亲爱的知惠子



吕玉琳
华东师范大学
笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

亲爱的知惠子：

你好！

自横滨一别，已经有了些时候。当时，北野天满宫的白梅开得正好，我从横滨乘夜行大巴前往京都，慕名拜访。然而现在，已经是全国各地桂花飘香的季节。多日未见，不知近况如何？

今日写信与你，是想谈谈我近来读的书。每每撰写读书笔记，总要遵循许多条条框框，还要陈列参考书目，令我头痛。诚然，每个人撰写读书笔记的方式总有不同。有人喜欢逐句摘录，将自己心仪的文字小心收藏；有人喜欢提纲挈领，将书籍的主要观点一一陈录；有的人喜欢天马行空，随意挥洒自己得到的收获。然而我想通过写信的方式，将自己杂乱无章的想法简要谈谈，也免了自说自话的寂寞之苦。

此次我读的是家永三郎先生的《日本文化史》。这本书我曾读过一次，不过其中内容已尽数遗忘。今日旧书重拾，顿时觉得似逢老友，过去的想法又翻涌而来。

家永三郎先生是以时代为序撰写此书的。每个时代的生产力不同，每个时代便只能创造出符合本时代的时代特征的文化，如

武家特色的能剧和狂言形成于南北朝，充满市民文化特色的歌舞伎和假名草子则出现于市民阶级繁荣壮大的江户时期。我们生活于现代，眼界所及之尽头皆是现代人所及之尽头。我常常觉得，古代人的思维方式与我们的思维方式往往天差地别。一个人只有不断地了解不存在自己思维方式内的世界观和价值观，提高自己对这些世界观和价值观的理解程度，才能够明白自己的灵魂深处到底需要什么。当一个人面对文化与思维上的冲击时，要么选择接受、改变自己，要么选择继续坚持自己的思维方式。毕竟，并不是所有过去遗留的观念都有被接受的必要。也就是在这种取舍之中，一个人才能不断地成长。现下的人喜欢讨论一些事情的意义，我觉得这大概就是我们学习历史、了解过去文化的意义吧。其实有时，旅行的意义也是相似，只不过这种扩大是空间上的而不是时间上的。

以上道理，我觉得对于一个国家或民族也适用。我一直认为日本是非常矛盾的民族。这里所说的矛盾，与鲁思·本尼迪克特在《菊与刀》中所表述的那种矛盾的民族性格不完全相同。大和民族在处理矛盾的事物上仿佛具有独特的技巧。如面对本国文化和外来的民族文化矛盾，古有书中所写日本文化与中国文化的矛盾，今有书中未写的日本文化与欧美发达国家文化的矛盾。再如传统文化与现代文化的矛盾，现代的日本社会，既有传统艺术文化的百舸争流，又有现代亚文化的繁花似锦。此中实例，前者可举艺术家天野喜孝的设计作品将穆夏等欧洲艺术风格和浮世绘艺术风格融合为据，后者可以众多尺八大师与重金属音乐合作创造新的艺术流派为例。这种处理对立统一关系的技巧十分值得中国文化人思考和借鉴。这种高深的技巧，大致来源于树立对待不同文化的正确态度。

不如就从中国文化与日本文化的关系来分析吧。在所有叙写日本文化史有关的书籍中几乎都会被提到，《日本文化史》这本书中也详细地陈列了日本文化中的中国元素。在新渡户稻造的《武

士道》中也分析了儒家思想对武士道的影响。木宫泰彦的《日中文化交流史》更是介绍了中日文化交流的详细流变。但如何正确处理中日文化的关系，是个很复杂的问题。尤其是在现代，许多人或许盲目地吹捧日本的众多亚文化，又有些人则抱着“日本文化许多都是从中国学去的”此类观点自行取暖。

我对这件事情的看法，不如就用我对中日“茶道”的看法来向你简单解说。日本茶道，如冈仓天心的《茶书》中所说，它要求洁净，要求茶道面前人人平等，要求摒弃奢华的侘寂，要求一期一会。有人认为中国茶文化的不足之处就在于没有类似《茶书》一样提炼茶道精神的著作。但我反而觉得，这正是中国茶道之所在。中国文化往往讲究“不可说”，要求感觉，非文字能够表达。中国茶讲究在茶中喝出不同的人在不同时刻的心境，讲究每一次所喝的茶都是不同的。不同之人所泡之茶不同，时过境迁茶味也随之变化，这不正是只有喝茶的人才能悟出其中甜涩吗？如此，中日茶道是有相似之处的，它们都要求珍惜每一次独特的品茶经历。但他们又有不同，日本茶道严肃而拘谨，中国茶浪漫而奔放。

我总听到有人哀叹，日本有茶道而中国无茶道。我却觉得，中国绝非无茶道，而是它并不与“日本茶道”相符。茶道本身是个日本茶人创造的词汇，以中国茶的精神附会日本茶道的精神，必然南辕北辙。

日本人处理文化上对立统一关系的技巧大概就是：抱着对本民族文化信任的心态，去了解其他民族的文化。比起学习日本先进的漫画、设计等具体的文化，树立正确的文化心态或许对现当代的中国人更为紧迫。

林林总总，赘述至此，多谢你听我叙述了这么多凌乱而稚拙的观点。由于我的日语远达不到能够叙写出这些观点的水平，只能暂且用中文将它们表达出来，格式也只能采取中文的信件格式。我衷心希望等待着将它们翻译成日语拿给你看的那一天。不知你是否还记得我们在横滨约好一起前往四川品尝你喜欢的火锅？若

有一日你来到中国，请务必让我陪你游览这里的大好河山。

顺颂秋祺

你的中国朋友 リン

2019年9月19日